

されては居らぬ。例へば、美術館の建設の如き、その最も顯著なるものゝ一つであつて、美術界の爲のみならず、社會一般の趣味的教育、又國家の體面から觀ても、その必要は、何人も疑はぬ事であるが、當路者は之を等閑に付して、毫も顧慮するところなき様に見ゆるは、甚だ感心せぬ事である。一部の人は、財源の缺乏が、其理由であると云ふて居るが、これに就て云ふべき事が、目下、西洋で問題となりつゝある骨董品の賣買に課税して、之れを以て、美術奨励、保護の施設經營費に充用すると云ふ案である。骨董品價格の暴騰は、近頃の顯著なる現象である。元來、美術品の價格は、購求者の愛玩、強烈なる場合には、突飛、法外なる程度に騰貴するは、不思議で無い。然かし、近頃の暴騰は、主もに、富豪の虛

榮心と、一種の安全なる財産獲得の精神から出たものであつて、唯々、趣味の満足ばかりでは無い。即ち、古美術品は、既に、趣味の問題を離れて、財産の性質を有するに至つたのである。然らば、之に課税して、相當な財源を此處に求むると云ふ事は、決して、不當なことではあるまい。家屋、土地の賣買は、勿論、日常、必需の物品にすら、殆んど、課税せられぬものゝ無い、今日に於ては、骨董品の賣買に課税すると云ふ事は、無理屈な事ではあるまい。其實、施の方法、又課税の標準を、幾許の賣買以上に止むべきかと云ふような、細部の問題は、今、茲て、論究すべき限りではなく、之は、一に、當路専門家の攻究に任かす譯であるが、唯だ、斯かる特種の課税を以て、特種の施設經營費に充つる計畫の、適當なる施設である

事を認められたい。白耳義、佛蘭西などでは、觀劇料に慈善税を課して、慈善費の財源に充てつゝある事は、人の知る處である。英國で、麥酒に課税して、工藝教育の財源となしつゝあるのも永い以前からの事である。骨董品の課税を以て、美術奨励保護の財源とすると云ふ事は、最も條理ある處置であると思ふ。美術上の施設經營を完備するの急要上、當路者の一考を望む。

美術界と輿論 美術界の諸雜誌に、社説の類を掲載するものが流行し出した。其説の當否は別として、此如き傾向は、美術界に、輿論なるものゝ、漸く、發生せんとするの兆候として、大に重視すべき價あるものと思ふ。從來、美術家なるものは、兎角、私事にのみ

頭腦を傾け、自己を中心とする小問題に没頭し、美術界全般に關する公的問題に就ては、甚だ冷淡な風であつたが、近頃、漸く、覺醒し來つて、美術界全般に關する問題を考慮し始め、其主張を發表するに至つた事は、喜ぶべき事である。自分は、斯く雜誌、新聞に從事する人々が、一般問題を論議すると、同時に、世の美術家が、彼等の私見を、盛んに、公表せん事を希望する。美術界の健全な輿論は、實際、美術の事を知悉する美術家自身の意見なる基礎の上に立つのである。美術家、各自が、互に、其私見を公表してこそ、始めて、真正なる輿論が形成されるのである。かの「倫敦タイムズ」の公簡欄に、絶えず、現はるゝが如き、美術家の遠慮ない論議が、我が新聞、雜誌にも、續々現出せん事を、熱望に耐えない。(大正二、十二)

美術局 美術に關する行政を料理すべき美術局なるものゝ設置が、國家として、必要か、不必要かと云ふ問題が、今、英國に行はれつゝある。此問題は、美術家自治力の強弱と、其衝にあたる官吏の人物如何に依りて、定まるべき問題で、一概には、云へぬが、我日本^の如き、何事も、政府に信賴する國情の國では、原則としては、確かに、美術局設置は有利なる事と思ふ。我文部省内にも、一時、美術課といふものが設置せられたが、今は無い。併し、美術上の施設、按排に就て、國家として、せなければならぬ事項は甚だ多い。殊に、美術に關する政務が諸省に分屬して、毫も、統一されて居らぬは一の失態である。美術の振興、獎勵、美術家の養成、保護、美術館の設立、及其經營、古美術品の保存、地方美術工藝の作興、風致の

保護、都市經營と美觀的施設、社會的趣味、教育の計畫などは、國家が、是非共せねばならぬ事であつて、別して、我國の如く、世界に於ける有力なる美術國として認めらるゝ處では、此如き機關の設置は必要であると思ふ。英國では、サー、ロバート、フオン、ハアコマー、サー、チャード、フランプトン、其他、有志の美術家諸氏が此運動の主動者である。由來、我國の美術家は、自家の技術にのみ腐心して、一般美術の振興、獎勵、教育、保護等の事柄に顧慮するものは、甚だ尠ない。無論、美術家の本領は、超然として、世務を顧慮せず、自家の藝術にのみ、全心全力を傾倒し、毫しも他事を思惟することな^い處にあるのであるが、併し、汎く、自己の關係する専門事項の運命を顧慮すると云ふ事も、亦、彼等の義務と云はねばならん。

彼等は、自家の天職たる美術を普及し、國家社會に於ける美術家の地位を自覺し、適當にその義務を果すと、同時に、相當に、其權利を主張せねばならん。殊に、美術に關する國家の施設、經營が、不行届勝なる我國の現状を觀ては、美術家が、黙々として、單に、私人的利害にのみ没頭して、毫しも、公共的思慮の無いと云ふ事は、非常なる誤りである。總てのものは生存競争の渦中に在るのであつて、相當なる努力をせぬに於ては、美術なるものも、將來、如何なる運命に遭遇するやは計り難い。心ある美術家は宜しく起つて、此方面に盡さねばならぬ。美術に關する政務が閑却せられつゝあるは、美術家が美術に關する自治心を缺き、自ら輕んじ、自ら侮るの結果である。美術家の反省を願ふ。

地方美術の振興 我國の内地には、古來、種々の特色ある工藝品がある、建築ある、民間藝術がある。併し、近來、何れも、大に衰微し、其内、廢滅に歸したるものも尠くない。今の内に、篤實なる學者、美術家をして、全國各地を巡回せしめ、地方特有の手工藝品、住宅建築、民間藝術等を精細に探究せしめ、之が振興を圖りたいものである。此如き方法の實行は、管だ、各地方傳來の貴重なる藝術の衰亡を拒ぐのみならず、これを機として、或は、見事なる模範を見し、或は、地方の振作を計り、或は、地方趣味を誘導するの道を見出し得る事となるやも知れん。交通の便開けて、地方の特色、漸く、減退し、機械工業の進歩と共に、手工的作業衰頽し、剩さへ、不調和、無意味なる歐風の流行は、地方の趣味を攪亂しつゝあるの

ある。趣味の特色と、地方工藝の優點を調査し、其特色を保護することは、確かに、目下の急務であると思ふ。

(大正三、十二)

美術家の地方團體 近頃、土陽美術會とか、兩毛美術會とか、出身地を同うする美術家が集合して、團體を組織するの風、起り始めた。是等の團體が、單に、會員各自の社交機關たるに止まるか、或は、各自出身地の先輩、富豪に依頼して、自己の利益を獲得する手段として、これを利用するぐらゐに止まらば、其益餘り多くはあゝるまい。併し、是等の團體が、其郷土固有の美術並に趣味の開發に努め、地方的特色の發揮に努め、斯くして、互に郷土の特色を保護し、其發展を計ると云ふならば、其効果は極めて多いと思ふ。斯の如き精神に依て成り立つ團體が、續々各地方出身者に依り

て組織せられたらんに、我全國の美術開發の爲め、結構なる事と思ふ。

(大正三、二)

研究所の效力 東京、京都の兩市が、美術獎勵の爲に、年々、消費しつゝある金額に就て、頗る興味ある統計が發表せられた。此統計を見ると、最も多額の支出を受けつゝあるものが、京都の陶磁器試験所であつて、他の美術教育機關の如き、一萬二千圓乃至一萬八千圓の小額なるに、此試験所は、二萬五千圓の支給を受けつゝある。京都市美術獎勵の任に當りつゝある人々が、如何に、此試験所を重視しつゝあるかは、之に依て推知し得る譯である。我等は、營利に汲々たる商人の經營以外、別に、遠大なる理想を標準とし、經濟的利害に超越して、單すら、研究工夫に、心を潜むる機

關の必要を認むる者であつて、此の如き目的の機關は、唯だ二三小規模の市的經營に止まらず、國家的大規畫の經營をも望む者であるが、現存する是等の機關が、實際、我等に實示する成績を考へると、唯だ、其無用を感ずるのみならず、寧ろ、美術界に害毒を流布し、過去幾百年間、我等祖先の額に汗して獲得したる効果を、多額の費用を支出して、速に、亡ぼさんとしつゝあるかの如く想はさしめざるものゝ趣きは、我等の頗る遺憾とする所である。我等は京都の陶磁器試験所が、京都陶磁器界に、如何なる功德を興へしか、今現に與へつゝあるかを、試験所經營者の側よりも、寧ろ、窯業者の口より聞かん事を願ふ。我等は、今の京都に、竹仙、藏六、清風、の如き、個人としての名工あるを知て居る。併し、試験所が

陶磁器全般に亘つて如何なる好結果を興へつゝあるかは、未知の問題であつて、其存在の價值を疑ひつゝある者である。試験所としては、京都市營のそれ以外、我が越中島附近にも、農商務省の管轄に係るものがある筈である。如何なる効果を擧げつゝあるやは、殆ど誰として知る者の無いは、未だしも、此如き機關が、實際、都下の一部に、存在しつゝあるさへ知る者も無いのである。科學の進歩を誇り、數理の萬能を唱ふる學者連を驅り集めて、而も、彼等の努力が、實際に於て、遙に、古伊萬里、古九谷に及ばず、辛ふじて、伯林、巴里の勸工場に散見するが如き、下劣なる灰皿、ペン皿でなければ、粗硬なる便器、土管の製作に落ち、或は犢鼻褌に刺繍したかとも想はるゝ硬質陶器のような作製に止まるに於ては、

學者も、科學も、あつたものでは無い。若し、是等數理學者の集合たる所謂、試験所なるものが、純全たる實用的陶磁器の研究所であつて、初から、美術的理想のないものであると云ふならば、我國家は、別に、美術的作品を主眼とする機關を設け、全世界の陶磁史上に、光輝燦爛たる位地を占むる我窯業の活脈を繼續するの方略を立てなければならん。單に、國費、或は公費を以て維持するが故に、或は、偉らそうなる人物の姓名を羅列するが故に、直ちに信頼し得べきものと、早合點し、少しも、其真相と、實果を思はない習慣は、我國國民の最大弱點であつて、此弊風を改めなければ、我國が世界の競争場裡に勝を占んことは覺束無い。唯だ試験所ばかりでは無い、學校、團體、何々委員會、何々研究會、悉く、濁り無い眼

光を以て、常に監視し、適當なる人物の配置に注意し、忘れ者を追拂ひ、熱心家を獎勵し、其功果を汎く一般に發表する事をせねば、徒らに巨額の國費を浪費するばかりで、何等の利益も擧らぬであらう。各所の美術的教育、或は研究の集團を一洗して、眞に國費を拂ふ丈の價ある者とする事が現下の急務である。

收賄事件 我海軍の收賄事件は、種々の方面に、種々の結論を與へたが、其結論の一つは、我國民が、常に自慢するような、君子でも善人でもなく、ブシドー、ジュウジュツの評判にも拘はらず、全世界の人間に優りも劣りもせぬ唯の人間であると云ふ事實の實證せられた事である。自身の同胞を以て、特に恵まれたる善良

な人民と思ひ、自個の國籍ある國家を以て、世界無比の優れたるものとする信念が、健全なる國民的團合に一日も缺く可らざるものである事は、恰も節操疑はしと思はるゝ夫婦の間に、健全なる家庭の一日も結ばれざるが如くであつて、此信念の連鎖無くして、強力なる國家的團合成立すべしとは思はれない。我輩は此有力なる國民的連鎖を失ひたる事に於て、此度の事件を最も遺憾と思ふと同時に、世界に冠たりと云はるゝ所謂東洋の美術國なるものが、果して、東洋君子國の迷信以上なるやに想ひ至らざるを得ない。清廉潔白を生命とする武士的人物が政治の全權を握つた、君子國の時も曾てはあつた。活淡寡慾常に感興に沐浴する眞の美術家に充ち満ちた、世界の美術國たる時もあつ

た。併し事實は悉く過去の事である。美術界の一リヒテル、一ブーレーが現はれ來り、今の美術界に名聲ある所謂大家なるものゝ真相を摘發したならば、其結果は如何であらう。我美術國の名は、リヒテル。ブーレーに耐ふるか、どうか。

(大正三、二)

事件の與ふる教訓 京大法科教授會と澤柳總長との衝突事件は、文展審査委員の選任に對して、一つの教訓を與へた。それは從來の官僚主義が、純粹なる役人の頭腦を以て、毫も専門家の考慮を參酌せず、專斷に、無謀に、任免を執行するの弊風である。今回の教授會の主張は、専門家が素人なる役人の專斷無謀に對する反抗であつて、壓制未開の時代は、兎も角、開明の今日、憲政治下

の思想から観ては、寧ろ當然の要求であつて、斯る衝突は今後各種の方面に於て續々として起るであらう。純官僚式の専斷無謀なる處置は、最早今後の社會に於て通用せぬことは證明せられた。我等は常に文展審査委員の選任に就て、専斷無謀なる官僚式を非なりとし、藝術界の事情に精通し、各個人の人格、學殖、鑑識等に就ても熟知する朝野有識の人士に諮つて其意見を參酌すべきものであると主張し續けて居るが、偶々今回の京大事件が、我等平素の主張と一致したのを見て、益々平素の所信の誤らないのを知つた譯である。

出品法の改善 新聞の報道に據ると、我政府は桑博參加の事を

決定したものと見える。愈々そうならば、美術部出品に就ては、今から直に其覺悟を以て、準備に着手し、最も賢明なる方法を以て、充分の成功を收めなければならぬ。從來、萬國博覽會參加の場合には政府から、出品を各個人に勸誘し、俄か仕入れの作品を集めて出品するが爲に、其作品は毫しも代表的と云ひ得ない場合が多かつた。今後は大に改善しなければならぬ。歐米諸國では、萬國博覽會參加の場合には、最も藝術界の事情に精通する、信用すべき藝術家の團體に委嘱し、過去十年乃至十數年間に於ける代表的作品を、各作家の畫室に就て、又は蒐藏家に就て選擇し、之を編成して出品するが爲に、其出品は其國藝術の精彩を發揮し、博覽會出品の意義を完うし得る譯である。我當局者も從來

の誤れる方法を一變し、歐米諸國の例に倣ひ、最も信任すべき藝術家の團體に委嘱するか、或は相當なる人物を集むる委員會を組織して、各作家の過去數年間に於ける代表的傑作を選び之を出品する事に改めたいものである。固より各作家が自ら出品者たるべきは論を俟たない。唯だ俄仕入の駄作を排斥して、我藝術界を代表するに足るものとしたいのである。

(大正三、二)

小美術學校の必要 輓近、駭々として底止せぬ、工業教育普及の趨勢は、世界何れの邦をも物質的方面諸般の改善に遺憾なからしむるようであるが、一方に於ては、此工業的製作理想が趣味本の製作品を驅逐し、漸次總ての加工品をして乾燥無味なる實

用品に墮落せしめつゝあるの情況は、誠に慨嘆すべき事である。殊に、我邦のような一般國人の趣味性豊かに、國の何處に於ても情味掬すべき工藝品の産出せられた處では、愈々以て遺憾である。現に各地に設置されてある工業教育機關の課程を観ると、一見、美術教育に接近しつゝあるように見ゆるも、其實は決して然ふてない。何ぜかと云ふと、素と教育なるものは課程の組織や配合の問題では無く、教育本來の精神にあるのであるから、絶えず需用者の要求を標準とし、價格の高下を顧慮して製作に従事する者にとつては、趣味の問題は、根本の問題で無く、經濟的方面から打算した一種の商賣道具に外ならず。之を全然自己の生命と離るべからざる眞劍勝負の問題として考へ、世間を顧慮

せず、經濟を意にせず、趣味の一事を以て、殆ど一種の道德の如き觀念を以て製作に従事する者と比べては、其間に雲泥の差がある。美術教育とは、趣味を以て一種の商品と認めず、之を以て生命とする人間の教育である。我輩は工業教育を決して輕視する者ではない、寧ろ其方面に於て益々盛ならん事を願ふ者であるが、工業教育の普及を以て、美術教育の普及しつゝあるかの如く思ふことの非常なる誤謬であることと、實際に於て、機械的工業思想が一般に美術趣味を破壊しつゝある事を確信する者である。眞面目なる感興の上に建てらるべき製作は、到底、工業教育の爲し得べき處ではない。故に、地方に於ける小工業學校の設置と同時に、地方に於ける小美術學校の必要の認められ、或は

私設或は官公設の小教育機關の續々興らん事を切望する者である。

地方人の趣味 社會と趣味を論ずる者は、兎角、一般人士の趣味性薄弱であつて、充分美術の保護者たる力の乏しいを慨嘆し勝てあるが、實際、地方を遊歴して、種々の方面に現はるゝ現象を観察すると、我邦人士の美術心は薄弱でないのみならず、寧ろ、非常な力の存在するを認めざるを得ない。却て憂ふべきは、そを満足すべき立場にある技術家の缺乏と彼等の趣味の劣等な事である。何處の小都市にも、骨董屋の無い處は無く、何處の小市にも、陶器、漆器、金工、或は木具、織物、染め物など、何にか趣味的産業の

存せない地は無いと云ふて可い。然るに、實際の製品を観ると、其大部分は趣味極めて下劣なか、或は材料粗悪であつて、到底、高等趣味の人々を満足することの出来ぬものであるのみならず、却て、如何がはしい趣味的習慣を助成する恐無いかを憂へしむるような物ばかりである。我國のよくな古い歴史を有する國では、又、兎角、舊物の尊重に偏傾する人間多數を占めて居る處では、骨董品に對する異常なる趣味は、毫しも怪むべきものとは考へないが、此偏傾は、實は、現時代の製作が古製作品に劣るものである事の一の證據であつて、現代を尊重する識者の眼から観ては、決して感心すべきことではない。殊に、美術家、實技家にとつては、之より甚しい耻辱は無いのである。例へば、我が工藝品の

海外輸出の狀況を観ても、新製品、一向に重ぜられないに反して、古製作頻りに愛翫せられ、名工の作品は殆ど其破片に至るまで、異常なる高價を以て購はるゝ有様は、古作品が、古作品たるが爲に愛翫せらるるのでは無く、全く、新作品の劣等なるが爲であつて、國としては非常なる不名譽の事と謂はなければならん。我國の勢力は、總ての方面に於て現在に基かなければならん。藝術の勢力も、無論、現在に存在せなければならん。而して時代美術を形成する根源なる國民の趣味的性が、尙健全であるとすれば、今日のように、地方美術の衰退を來したものは、美術家、實技家の無能、無趣味の結果と認むるの外か、他に原因あらうとは思はれない。我等は、政府の當路者を初め、我國美術問題に興味を有つ一

般人士が、地方的美術並に美術工藝の現状を視察し、此方面に於ける開發に就て何とか力ある方法を講ぜられんことを願ふ。

理想的住宅 第三回住宅改良協會々議は昨年末シンシナタ市に開催せられ、米國及加奈多に於ける住宅建築現状の根本的研究、及改良案を討議したが、其決議の要點は、家族同棲を誘致すべき小家屋の建設を保護すべき適當なる法律の制定にあつたと云ふ。此點に就ては、我國の現状は、彼等の理想であると思ふ。徒らに歐風の外見に惑溺せず、其實狀に依て詳らかに彼我の長所を比較講究するの要は、最も我歐風建築家にあると思ふ。

審査員選任の運動 風説に據ると、國民美術協會は、大正博審査員選任に就て委託を受けんと運動したが、失敗したと云ふ。吾人は國民美術協會が左程の勇氣あるとは信ぜぬ、又同協會が團體として、さる決議をした事を聞かない。併し、吾人は、寧ろ、其風説の事實であることを希望する者である。獨り國民美術協會に限らず、國華俱樂部にせよ、日本美術協會にせよ、なぜ堂々と斯る重要な問題に就て、當局に向て各團體の意見を提供せないか。美術の振興に關係ある重要な事項に就て、最も美術界の事情に精通し、又最も密接の利害を感ずる大團體が、公明嚴正と信ずる意見を、當局に致すは、當然の權利であり又義務である。美術家が自卑自屈、唯だ官人の指命に是れ従ふて、美術界の公見を發

表するの勇なきを、如何にも意氣地無いと思ふ。美術以外の諸界には、帝國教育會もある、大日本農會もある、水産會もある、衛生會もある、其他、民間幾多の有力なる團體が、それ／＼當局者に對しての助言者の役を勤め、當局も亦その助言を容れ、參考として居る。獨り美術家のみ、當局に認識されぬ道理は無い。美術家も自らを輕んじてはいかん。當局も美術界の公見を容れねばならん。

(大正三、三)

美術に對する國家の態度　大統領ポアンカレ氏は、舊臘開催せられた、巴里、官立美術學校五十年記念祝會に臨席し、校長ボナール氏の開會の辭に對して堂々たる演説を爲し、美術教育に關す

る嚴正なる識見を表明した。一官立美術學校の記念會に、大統領親しく筵席に列なり、且つ單に儀式一遍に止まらざる、眞面目にして、堅實穩健なる意見を演説したとは、流石は美術國として、世界に雄視する佛蘭西である。斯くてこそ、佛國の美術が世界に冠絶する所以である。之れを東洋の美術國を以て自任せる我日本政府の美術に對する態度と比較すると、撫然として言ふべき言葉なきに苦まざるを得ない。試に視よ、我國唯一の官立美術學校卒業式に、從來、文部大臣が自ら臨場したことは、甚だ稀れであつて、多くは、代理者をして、儀式一遍にして、意味空虚なる祝文を朗讀せしむるに過ぎない。如何なる場合にも、未だ曾て、文部大臣が美術に對し、又美術教育に對して、眞面目なる意見を

表明したような事は無い。況んや、内閣總理大臣が美術に對する識見を發表すると云ふが如きは思ひも寄らぬ處である。現に我文部省直轄學校の順序を見ると、盲啞學校を最末位として、美術學校は實に之より第三番目の上席に位するに過ぎない。國家の美術を尊重せざること如何に甚しきかは、之を以ても證明されるのである。斯の如き冷淡極まれる國柄にも拘はらず「美術は我國の精華なり」と稱せられ、「日本は東洋の美術國なり」と唱へらる。寧ろ、滑稽と云ふべきでは無いか。國家並に國務大臣が美術を冷視すること斯の如くてあつて、どうして美術の隆興などが望めよう。既に、美術を冷視すること此通りである。美術家を輕蔑することの甚だしきは當然の結果である。

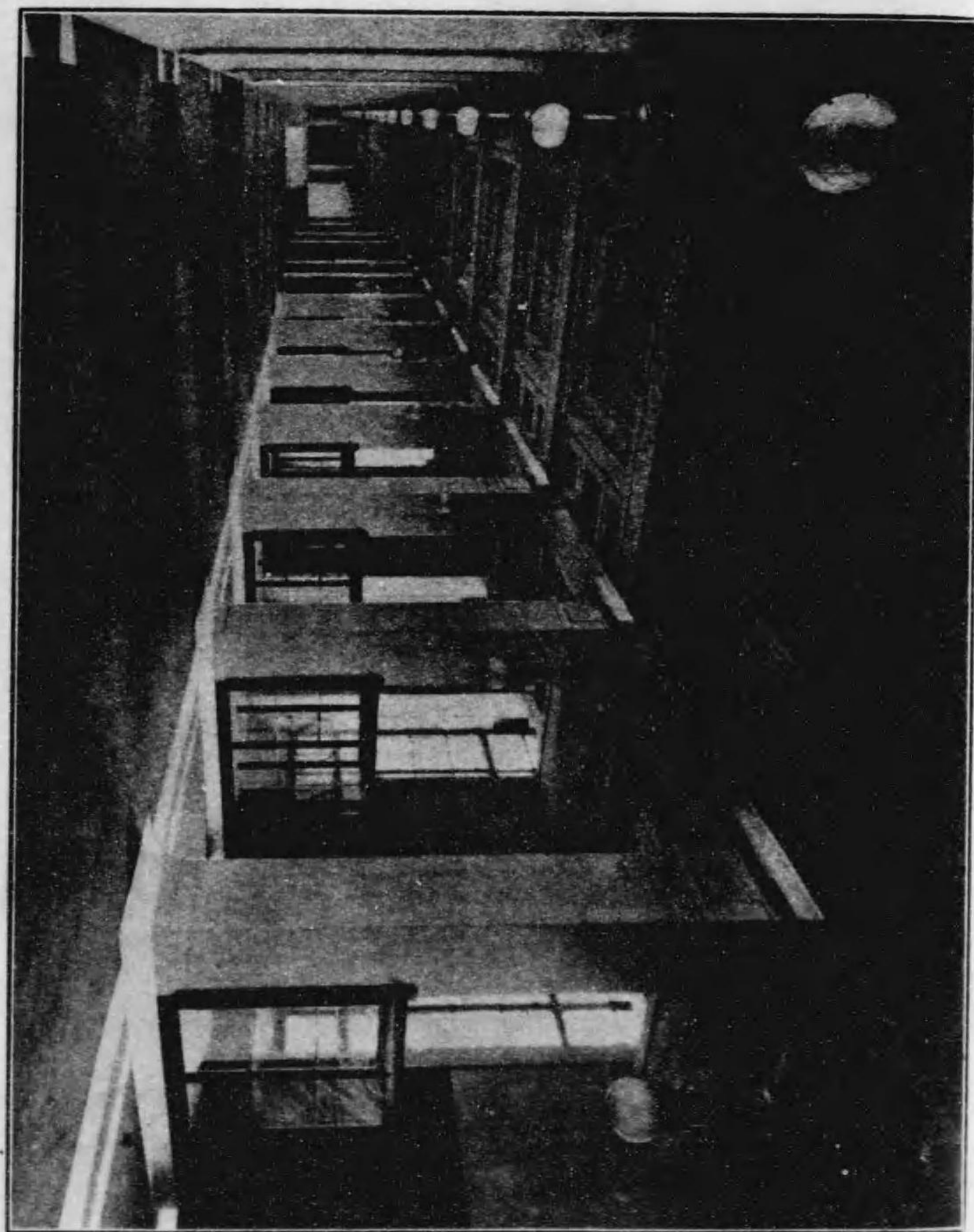
美術家優遇の必要に就いては、吾人の屢々唱道する所であるが、未だ國家並に社會の注意を惹起するに至らぬは遺憾千萬な事である。之を實際に見ても、東京美術學校は、一兩名の勅任教授を有し、帝室技藝員は纔に奏任待遇を受くるに過ぎない。嘗て帝室技藝員の死去したる際、叙勳の事を當路に請ふたが、在官の經歷ない爲め、遂に詮議に上らなかつた例もある。由來、官吏偏重、軍人偏重の我國では、斯かる變態を何の不思議とも思ふ者もないが、斯の如きは美術を獎勵し、文運の發展を圖る途ではない。近着の報道に據ると、獨逸の美術歴史家ボーデ氏は西班牙からザアン、デル、ゴエス、フレミッシン畫家、一四二〇—八二年の畫を購入することに盡力した功勞を主として、世襲貴族に擧げられた。

時事小言

嘗て佛蘭西の畫家メイソニエーの國葬の禮遇を受けたる實例など、思ひ合せて、如何に歐洲文明國が美術家を優遇するの厚きかを知ると同時に、我國の軍事を偏重して文教を輕視するの蠻風を悲まざるを得なり。

(大正三、三)

博物館後援協會 海外通信に據ると、近頃、後援會に關する二箇の事件が起つたのを知る。其一は佛蘭西のルーザル後援協會が、曩に盜難に係つた名畫、デオコンダの返還に關し、仲介の勞を取つた伊國フロレンス市の骨董商ジエリ氏に對し、謝禮として金壹萬圓を贈つたと云ふ事と、他は、亞米利加美術後援會とも稱すべき新團體がシカゴ市に生れ、今後、米國畫家の作品を漸次購



東京下館新館博物館ミュージアム、女倫

入して之をシカゴ美術館に寄贈し、實際の購買に依て、米國美術の獎勵を實行せんとするを目的とし、五年間毎年一人四百圓を醸金する會員を募集し、既に百五十九名を集め得たりと云ふ事である。斯の如き實例は、歐米諸國に於ては、決して珍奇でなく、到る處に、之に類した組織あつて、美術の獎勵に貢獻しつゝあるのである。英吉利のブリチシ、ユミユゼアムに於けるナシヨナル、ア、ト、フアンドの如きも、此顯著なる一例であつて、同博物館の盛大を致せる、又其後援に負ふところ尠くないのである。是等後援協會の組織は、各國、多少の相違はあるが、要するに、民間の熱心なる篤志家が幹旋盡力し、富豪を遊説し、勸誘して、適宜の醸金を募集し、之を以て、博物館又は、美術館の、備品購入費を補ひ、又

は適當なる美術品、參考品を購入して、之を寄附するを目的とするものであつて、博物館又は美術館の如き、巨額の資金を要する割合に、目前一時に其効果を現はし得ざる、極めて地味なる事業に取ては、此の種の熱心なる後援協會ありて、補助者となり、獎勵者となり、支柱となる事の極めて肝要なるは言を俟たない。

特に、古美術品及工藝品、歴史的參考品の如き、年々其價格騰貴し來り、有數の物品に至つては、千百萬の巨額を投ずるにあらざれば購入することの出來ぬ貴重品を獲得するに就ては、是非共此如き後援に依らねばならぬ。現に、我帝室博物館の如きも、近來古美術品、工藝品等の價格暴騰せる爲、民間富豪と競争して、優秀なる作品を購入する事能はざるの状況にあると聞及んで居る。

されば、社會に名望あり、信用あり、美術並に工藝の獎勵、其他、博物館、美術館事業に興味あり、熱心ある人々は、同志を集め、博物館後援協會を組織し、富豪に遊説し、勧誘して、資金を募り、優秀なる作物又は參考品の賣却せらるゝ場合には、進て之を購入して備品となし、博物館を豊富にし、國家寶庫となすことは、刻下の急務であると思ふ。醜金の方法としては適當なる出金額を定め、年賦分納の如き方法に依らば、公共心ある富豪の喜んで應ずる者、必ずしも、尠くはあるまい。唯だ、その斡旋の衝に當る人物が確實であり、名望あり、信用ある者でなければならぬ事は勿論である。斯の如き方法を以てすれば、既存の博物館を後援し得るのみならず、別に我國になかるべからずして、未だ無い美術館を創設す

ること、或は至難の事ではあるまい。吾人は美術奨励に熱心にして、斯界に名望ある人々が、速に起つて、此種の協會を組織し、確實なる方法を定めて、大に盡力するところあらんことを希望する。

(大正三、三)

圖畫教育 舊臘二十九日、シカゴ市に於て開會せられたる北米大學美術教授協會第三年會の集合に關する記事を一讀して直ちに想ひ起すものは、我圖畫教育者の現狀である。海外諸國、殊に、英獨米佛の圖畫教育に従事する者と、一般高等教育に附加せらるゝ美術教育に關與する者等が、自個の職責を明らかにし、教育界に於ける美育機關の必要と、他教育課程との關係を明確に

して、一は社會に向て、美術教育の重要な所以を發表し、一は、互に協力、團合して、美術教育者の勢力を張らんことを努めつゝある間に、我國教育界に於ける此部面の擔當者が、現下、何を爲しつあるやに想ひ至るは、汎く美術の問題に興味を有する者にとつては、ふさはしき聯想と思ふ。我等は、我邦の各處に、圖畫教育會なるものゝ存在するを知て居る。時々、俄か思ひに、發刊せらるゝかと考へらるゝ、極めて薄弱で、毫しも現下世界の圖畫或は美術教育思想を代表するに足らない、議論の登載せらるゝ雜誌の存在するも知て居る。又、我等は、社會に相當なる名聲ある畫工で、其部面に出没し、各所に小陣を張つて、絶えず、相互の私的行爲を摘發し、殆ど、緣日商人の地張争かとも想はるゝ、自個の圖畫

教科書賣場を中心とする、所謂圖畫教育者の各處に存在する事實をも知て居る。併し、不幸にして、私心なく、利己的、見地を離れ、眞に我圖畫教育道の爲に盡力せんとする團合あるを知らない。我輩の淺薄なる知見に據ると、抑々圖畫教育なるものは、歐米に於てさへ、未だ確固たる地盤の上に据ゑられたるものではなく、普通教育に附加せらるゝ美術教育なるものは、未だ試験的、道途にあるものであつて、其功德は、多く、理論的、空想的のものに止まり、實際に於ては、未だ其效果の認められたるものには無いと思ふ。一般教育者、殊に科學、數學を偏重する教育者が、常に圖畫教育を壓迫し、且つ一方に於て、教育全班監視の立場にある社會の大部分が、圖畫を以て殆ど無用なる課程と思惟し、同時に斯

道に關與する人々の輕視せらるゝは之が爲であらうと思ふ。歐米に於てさへ斯の如き情況であるとすれば、我國のような國民の心性、兎角、科學的考察を缺き、今後、世界の競争場裡に奮闘せんには、此方面の教育の非常なる發展を要する國柄では、圖畫教育者の異常なる團合、研究あつてさへ、前途の光明甚だ微かなりと想はざるを得ないに、唯、眼前の利益に眩まされ、互に惡口し、毫も學術的研究に努めず、全般の運命に思ひ至らざるが如き今日の有様では、圖畫教育の前途は甚だ危險なるものであると思ふ。場合によつては、我教育界は此贅物を驅逐し、寫形の實技は、博物の教師か、習字の教師によつて、曖昧に兼務せらるゝの日が來ないとも云へない。我輩をして此不振の病源を指摘せしめば、下

の事項を以て其最も重大なる病源とする。(一)圖畫教育は藝術を利用するものにして、藝術それ自身では無い。美術家を集めて、圖畫教育を完ふせんとするの愚は、詩人を集めて、倫理教育を行はんとするの類である。圖畫教育と云ひ、美育と云ふ教化の重大なる、根本的任務は科學教育の缺點を補ひ、人間情緒の開発に當るを目的とせなければならぬ。此教育は藝術の一端を利用するのであつても、とゞ藝術家の當るべき任務ではない。教育者の條件は、此根本的大任を理解し、種々の藝術を利用し得る聰明なる教育者でなければならぬ。無智な下手畫かきを驅り集めて、圖畫教育に當らしめた事、先づ第一の誤である。自分はこの點に於て、藝術教育以外、別に、師範科なるもの、現美術學

校長正木氏に依て創設せられたるを、圖畫教育者改良上最も適切なることであつたと信ずると同時に、同科をして、今少し振興せしめん事を希望する者である。(二)下手畫かきの飯喰業となりたる結果、遠大な根本的學理の研究者の無い事が不振の有力な原因である。半解の原語を辛ふじて誤譯したかと思はれ、或は、身の入らざる歐米學究の囁語であつて、毫も我國情に適應せぬ理論の恐喝的振り廻しの如きは、何れの學術界でも、下廻りの役目であつて、圖畫教育界は今少し大なる人物を要するのである。之を煎じ詰ると、人物の缺乏である。何れの方面にも人物の乏しいは我國の現状である。而して其缺乏の大原因は何れの方面に於ても、目前の物質的利害に緊束せられ、遠大なる理想

を夢見る人の稀れなることである。物の興衰は夢見る人の多寡に依て決す。實行の背後には、常に偉大なる夢想者が無からねばならん。我圖畫教育界も亦、大夢想者の缺乏に苦むに過ぎない。

(大正三、三)

美術學校祝賀會 東京美術學校は、開校以來滿二十五年を經過した處から、本月二日、其の記念祝賀會を開いた。今から二十五年以前を回顧すると、我國では、美術の尊重すべき所以、社會に認識せられず、先見ある先輩數氏の熱心なる主唱に依て美術教育の端緒纔かに開かれたるに過ぎなかつたが、爾後、文運日に開け、近時漸く美術の社會に於ける須要を理解せられ、其尊重すべき

所以も亦次第に認識せられんとするは幸なる事である。此間東京美術學校は唯一の國立美術教育機關として、幾多の埋没せられたる美術家を、教授に登用し、幾多の美術家を養成し、多少の優秀なる作家をも出した。世間の一部は同校が、年々、多數の卒業生を出した割合に、優秀な作家の出かたが慤いと非難もする。又教授上の施設方案に就ても種々の風評無いでもない。併し、兎も角も、相當なる効果を挙げ、美術家教育の任務を果たしつつあることは争ひ難い事實である。況して、我邦には未だ美術局の設置なく、美術上の行政を統一し、その施設を經劃實行すべき機關存在せぬ處から、東京美術學校は、實際に於て、我國美術行政の中樞となり、策源地となつて、微かながらも、唯一の燈を點し

て、美術的智識と趣味を社會に宣傳し、鼓吹し、普及し、我國の美術を今日の狀況に向はしめ得たるに就て、與りて力ありたるの功は没却することは出来ぬ。之を以て觀ても、東京美術學校の存在が決して無意味でなかつたことは證明爲し得べき事であつて、吾人は同校の益々發展して其功績の數層偉大ならんとを冀望する者である。由來、美術界には「學校より大家生れず」と云ふ一の迷信がある。併し、畫塾の短所であつて、學校の長所は、技術の練習に偏せずして、須要の智識を啓發し、手腕を練磨すると同時に頭腦を修養せしむる處に在る。美術教育の經驗に富む人の説に依ると、畫塾出身者は技術の練熟速かなようであるが、概ね、頭腦貧弱であつて、從て、技術の衰退も亦速である。之に反し

て學校出身者は當初、技術の練熟は遅々たるが如きも、頭腦の素養あり、智識の蘊蓄あるが爲に、技術の洗鍊を加ふるに隨て、益々力量を發揮し、比較的長き競争に耐へ、終局の勝利を占むる者多しと。修養の無い頭腦は粗雑で淺薄を免れない。淺薄な頭腦は枯渴し易い。陳腐を去つて清新に就き、徒らに先人の型式を踏襲するのみならず、時勢の潮流を理解して、常に新趣を揚げ、一家の識見を以て、猥りに俗流に雷同せず、卓然、自立、本領を發揮すると云ふには、智識的修養の忽諸に付すべからざるは明白なる事である。美術家に智識を要せぬが如く思ふは大なる誤謬である。審美の趣味は主として感情に屬するが、藝術は全人格の發露てなからねばならない。相當なる頭腦なくしては、逆も大

美術を産み得ない。美術家は決して型式の傳習と、手法の踏襲のみを以て養成せらるべきものでない。美術學校は美術家たらんと欲する者をして先づ其頭腦を修養せしむると同時に技術を練習せしむるが爲に須要の機關である。唯だ教育の方針が健全であつて、偏執に陥らぬ事を要するは無論である。幸に教育の方針を誤らず、適任の教師を得、天分ある生徒の入學することであれば、必ず優秀なる作家の産れ出づべき道理である。若し、東京美術學校から比較的大家を出さずとの世評が事實であつても、それは學校教育が美術家養成に適せぬと云ふ證據にはならない。其罪は教育の方針にあるか、校長其人を得ぬか、教師其人を得ぬか、或は天分ある生徒來らざるか、にあらねばなら

ぬ。東京美術學校が其の初期に於て、能く大家を出した割合に、近年、稍々振はざるの觀あるは掩ふ事の出來ぬ事實である。廿五年祝賀に際して、吾人は、徒らに過去の功能を賞讃して止むものではない。寧ろ將來に於て益々校運の隆盛ならんことを祈る處から、同校當局が此際猛省して、校則を刷新し、老朽と無能の教師を淘汰し、功勞ありし者は優遇して之を退かしめ、力量なき者は、斷然之を免黜し、以て祝賀の記念をして意味あり、實效あるものたらしめんことを希望する者である。

(大正三、四)

美術家の功績表彰法 美術と美術家に關して、屢々論議せられつゝ、毫しも當局の顧慮する處とならざる問題の一つが、我國に

於ける美術家の功績表彰の事である。現時に於て、少しく表彰に近きものが皇室技藝員の制度であるが、素とく皇室技藝員なるものは、其名の示す如く、皇室御抱への優秀なる技藝員であつて、一つの名譽たるには相違無いが、國家が美術家の功績に對して、それを表彰するとは、自から、別問題である。丁度、東京美術學校の教授が、多數の美術家から特に選拔されたものである以上、それに對して相當の敬意を拂はれ、又それを以て一種の名譽とするも、觀方によつては、適當なる事ではあるが、決して、美術家の功績表彰の手段でないのと似て居る。若し美術學校教授の任選を以て、美術家の功績表彰の一方法と考へたれば、それこそ、教育の機關は徒らに儀禮の式場と變じ、育英の事業は千歳に其

效を奏せぬ事であらう。

■國家に對する、あらゆる有功者を表彰するの道は勳章の制度である。此制度は、其創定の精神から觀れば、普遍的性質のものであつて、決して、ある一階級、或は一職業の專有物では無い。此精神は、我國に於ては、一時、没却せられ、殆ど官吏に限られたようであつたが、近頃、民間諸種の事業に關する人々にも授與せらるる傾向の著しく成りだした事は、其物の性質から觀て適當なる事である。國家に對する美術家の功績が、此制度の範圍中に包含せられぬ事は、不思議なる現象であつて、當事者の眼には、美術家なるものは、今尙、舊時の幫間、藝人と映ずるものと見える。近頃、官吏として學校に在職する一、二の畫家に、在職十數年の辛抱

に對して、叙勳の事があつたが、あれは、其人の技能に對しての事で無い事は、勳章の種類を觀ても明らかである。我等は國家が普通一般の方法に依て、美術家のみ待遇し得ないかを、不思議に感ずると同時に、國家的表彰の一事に於ては、今の美術家は全然穢多扱をされつゝある者と見做して可いと思ふ。高所から觀ずれば、今時の人、大方は國家社會に貢献しつゝある人間であつて、ある意味に於ては悉く勳章を受くべき筈である。併し、我等は、此高き見地からせず、普通凡俗の立場からして、世界各國の美術家と同じく、我美術家も亦此制度に浴すべきものである事を主張したいと思ふ。メイソニエーを國葬にした佛蘭西は此點での先導者であつて、英、白、獨、伊、西、歐洲至る處、美術家の叙勳を

以て、勳章制度の重要な事項と思はぬ處は無い。我美術の獎勵を念ひ、美術家の爲に一言する譯である。

穿 諷 記

■「良き物は永久の楽しみなり」とは誠であるが、之も相手次第である。世間の大部分は新しい物のほかに興味は無い。單に新しい物程、作者にとつて容易なる事なく、又新しい物ほど、商人に利あるものは無い。見る者、作る者、賣る者、皆新しいを好しとすれば、世に、「良い物」などの顧みられぬは當然である。

■人は異物の調和の出来難いを云ふ。解からぬ寝言と思ふ。饅頭とパンを調和した餡麵麩は如何に。シチュウと飯を合した牛飯は如何に。丸鬘と洋髪を合はした東髪は如何に。餡を冷

やしたアンスクリームは如何に。牛に馬を代へたバフテキは如何に。世は成功したる調和に充ちて居る。東西美術の融合など、朝飯前の仕事である。

■作文、手習いと禮式は、人の三大禍根である。禮式は眞の人情の流露を遮ぎり、作文と手習の與ふる一種の心理癖は、自然の眞味を翫賞する力を奪ひ去る。

■茶室が茶室向きの繪を生み、座敷が座敷向きの繪を生むと同じく、文展は文展向きの繪を齎らす。茲が妙所である。若し、今の文展に、寺の本堂か、書院の床の間に向くものゝみ現はれたら、それこそ、大變である。物の生氣は其反撥力に在る。一方にシヤチ固張つた時は、もう棺桶の時である。

■ 各國人の趣味性は、其愛好する食物飲料で解かる。英吉利の製作は、ブラム、プッチングの味に近い。日本人の好む製作は、刺身の味に似て居る。佛人の趣味は、モツカや葡萄酒に通じて居り、獨逸人のは、麥酒や腸詰で代表出来る。魯西亞や米利堅の繪畫が、ザオツカやソーダ、ウォーターに似て居ると云ふても、まんだら、ゴデツケとは成るまい。

■ 一に、賣名的手段として職業を選む人がある。始終、面燈の前に、全身を照りつけられねばならぬ人がある。併し、感心も疲勞れる。絶えず、同一の物を褒めるは、世間の耐えらるゝ處て無い。世間は褒めるにも、相當な變化を望む。之が爲に、評判を生命とする人は、絶えず、動搖する。動搖の終は絶望となる。

■ 男子の一生は、悪戯の一生、女子の一生は、厨戯の一生。偉大な悪戯を爲し得る者、ビスマルク。ナポレオン。バルザック。ニイチエ。ウイツスラー。ロダンとなる。問題は生氣の度合である。ザアイタリチーの厚薄である。

■ 美術家に、墮落の妙法がある。一定の期限をきつて、ある數の製作をやる事である。此法が百發百中である眞理は、世間無數の墮落畫かきのやり方で解る。

■ 獨逸に、古るい昔から、寺の鐘を鑄る名族に、サククス兄弟と云ふのがある。鐘を鑄る時に、長子傳承の秘密の呪文を唱へる。魂の問題であつて、方法の問題で無い。これが、科學萬能の獨逸の事であるから面白い。

■「味の素」と云ふものがある。自分は「味の末」と心得て居る。
 ■美術家に晦日無し、益も無ければ暮も無い。時を定め、日を限つて、良作は成り難く、買手は、毎月二十日前後にやつて來ぬ。素とく、天運に任す風流人の境涯、有る時にあり、無い時は無い。人並に晦日などを認めるは、美術家にあるまじき心懸と云はねばならん。

■理窟の解かる者には、理窟で説くが好い。理窟の解らぬ者を動かすには、ストライキの外は無い。金力、武力は強者の武器、嫉妬、陰險は弱者の武器、理智と教化は學者の武器、併し、愚物の征伐はストライキの外無く、又此武器ほど効能あるものは無い。
 ■性格から觀れば、人も植物も變りは無。同じ原則で生存す

る。強い陽光を要する者、日蔭に繁茂する者、蔓となり、他の木に縁つて巻き上るもの、低く、地面をのたり廻るもの、幹を延ばし、枝を張つて堂々と生存するもの、岩間に隠れて、密々と活きるもの、其種類は様々である。此原則に準じて、美術界の人間植物を觀察せよ。陰性植物の誤つて、日なたに、萎れた者、陽光の要るもので、日陰に追ひやられたもの、蔓性で、頼るべき親木の無い者、志を立て、岩間を飛び出して、直に、枯死した者、いかな類例も發見するであらう。

■工業とは、方法の問題であつて、美術とは魂の問題である。魂は、方法の缺點を補つて餘りあるが、如何に方法が進むても、魂の代りは出來ぬ。

■美術家の妻帯可否論は、古い昔からの問題である。サー、ジョシユアは無妻論者で而も、立派に實行し、フランスマンは妻帯論者で、之も美事にやり遂げた。問題は原則問題で無く、代物次第である。妻帯者の成功した例を観ると、女房の側で、第一、亭主の仕事に同情ある事。第二、金銭問題を一手に引受る事。第三、萬事費澤を省く事。第四、餘計な交際をせぬ事。第五、美術など云ふ事を、一際、知らぬ事、などが重なる原因となつて居ると思ふ。併し、こんな女は滅多に居まい。居ても、晝かきなどの處へは來まい。

■學校とは、要求ある者に手段を授くる處で、要求を授くる處では無い。佛蘭西の大統領が、美術學校での演説に、「學校は薪を供ふ。火は、諸君、自身に持來らざる可らず」の文句は、能く穿つて

居る。併し、大抵な學校と學生の關係は、切符賣場と、行き先の解らぬ旅客のそれに似て居る。

■技巧備はつて、技巧以上のものある人は上、技巧のみあつて、それ以上のもの無い人は中、技巧以上のものあつて、技巧の無い人は下、技巧以下で、技巧以上のもの無く、然も、兩者を兼備した如く振舞ふ奴は下下の下。

■時代の製作が、全然、其時代に味はれた例はない。あるべき筈が無い。半分の若手が製作して、半分の老人が見物する。此老人は悉く前時代の産物である。翫賞の標準が違ふ。人間が、ボカシに死ぬ原則を廢めて、五十年目に總變りとならぬ間は、新時代の作者は、永久に奮闘せねばならん。

■死とは、自然の甘い思ひ付である。ミケランジェロが居たらロダンの評判が何處にあらう。ルーベンスが活て居たらサージエントの威張る餘地はあるまい。何やかやと云ひ囃さるゝも、全く死の御蔭である。己の死を恐れて、沈く、死の恩恵を想はぬとは、能くく、浅見な人達である。

■單に、渡世の法としては、美術家が、左程に奮發する必要は無い。麻布、永坂の更科は、東京一の蕎麥屋と云ふ。併し、半町以内に平凡極まれる蕎麥屋がチアーンと營業して居る。美術家の奮發も、商人の奮闘も、渡世からでは無く、道樂からである。事物は、渡世本位で進む者で無く、道樂に依て進む者である。コロンバス、ガリレオ、リンコルン、エヂソンが渡世本位であつたら、如何に。

■繪畫、彫刻、建築、文學、同じ藝術でも、時代の變りて、夫々、損徳がある。ある時代の要求は最も建築に適し、ある時代のそれは彫刻に加擔する。西洋でもローマネスクとか、ゴシックとか云ふ時代は建築に適し、繪畫迄も建築に襲はれた。十六世紀の伊太利亞では、彫刻全盛を極めて、庭園の岩石までに彫刻した。今の時代は文學旺盛の時代で、繪畫も彫刻も時代外づれの藝術である。畫家、彫刻家のもてぬのも仕方が無い。

■惡物となる日本畫は、繪ではない、一種の家具である。所謂、日本畫なるものゝ一部は家具として發達して來た。丁度、十八世紀の佛蘭西畫に似て居る。此家具の必要ある間は、畫家の喰ひ損ねる氣遣は無い。併し、家具として扱はるゝ間は、繪として、日

本畫の發達する氣遣いも、亦、無い。

■妊婦は豪傑の像を見て、豪傑の兒を生み、美人の繪姿に接して、美女を産むと云ふ。成程、さうかも知れぬ。西洋人は希臘、羅馬の彫刻を理想として、幾千年の星霜を経た結果、姿はヴェキリーナスの如く、顔はフィデアスの彫刻のやうである。此理窟から觀れば、我等の母が、絶えず、寒山、拾得の惡物を見、床の間の羅漢の木像を眺めて、我等の如き風雅なる面相を生じたに就て、何等の苦情も云へぬ譯である。

■惡とは未だ知らざる善。短所とは時を得ぬ長所。弊害とは未だ認められざる利功である。「勝てば官軍」の眞理は善惡、長短、利弊、どれにも應用して誤らぬ。

■美術家は、自分獨りとの首ッ引である。批評家の標準は世界萬國、過去、現在、幾千年の間に現はれた製作、理想、成功、失敗の統計である。大きくとも、高の知れた自分一人を土臺として生存する作家と、大世界の過去、現在を相手として論評する批評家とは、其間、話しにならぬ懸隔がある。釣り合ぬは不縁の基、兎角、作者と評家の折合はぬは不思議な事でない。

■天才の作はムラである。出來、不出來が強い。茲が天才の天才たる處である。小人の作は拙いなりに、平均して居る。小人の作は註文して、左したる危険は無いが、天才の作は出來たものから選ばねばならぬ。

■自分の伯父は非常な地震嫌であつたが、これは安政の大地震

に出會つて、其慘狀を見たからである。此伯父が、始終、云ふて居た——安政の地震を見た者は、迎も西洋風の美術館などに賛成は出来ん。一と揺り揺れば、貴重な物は、瞬間に壊はれて仕舞ふ。貴重な品は、矢張、正倉院のように、地震の趣いと云ふ奈良あたりに仕舞つて置くに限ると。一理ある説と思ふ。

■趣味ある女を女房に有てば、製作の助けにもならうと云ふ人がある。程度の問題であるから、一概には退けられぬ。併し、普通の場合から見ると、高の知れた女の助太刀が多少の力になるやうでは、第一、亭主に見込が無い。寧ろ大家の女房は高等下女に限ると云ふハマートンの説に賛成する。

■成功、成功を祈つて、日夜奔走し、何事にも腰を曲げ、我を折てさ

へ、成功する者は稀である。技藝、學問に惑溺し、一寸も世間を顧みる暇無い者の、成功を望むは、餘りに横着な考へと云はねばならん。

■西洋から日本へ歸つて、真先に感ずる事は、萬事ゴチャ／＼して、鷹揚な氣分の無い事である。國も小さい、景色も小さい、根性も小さい、何もかも小さい。茲が我國の特色であつて、小刀細工の本場たる所以である。小刀細工でもつて居るので、恐らく、鷹揚にやつたら、破産するのであらう。

■古代の美術を觀て、其性格を判ずると、希臘は聰明、埃及は魯鈍、メソポタミアは豪膽、支那は老熟。

■美術家は悉く嫉妬深い。大家の傳記は殆ど嫉妬の歴史に過

ぎない。ミケランジェロ。ベンヴェヌト、チエリーニ。ヴァサリ。ベリニー一族から、近くはロゼチヤウイッスラーの傳記を見ても、終生、殆ど嫉妬と奮闘し續けた事實を知る。美術性と強烈な嫉妬は、如何にも、離れ難いものと見える。

■日本で支那風の山水畫が流行した理由の一つは、我國に無い壯大な山嶽の景色に對する要求であらう。西洋にも類例がある。和蘭土のエヴェルデンの描いた溪流の畫は、諾威の景色を想像したもので、之が又、非常に流行した。エヴェルデン自身は、曾て、諾威の地を踏むた事が無いと云ふ説になつて居る。

■「あの人は、畫かきには利口すぎる」とは、よく聞く詞であるが、

一寸聞くと失敬のやうで、能く考へると尤もと思ふ。眞の美術家は、決して調法な人間では無い。寧ろ、不便な人である。絶えず感情に働き、理智に疎い人間が、世間の役に立つ譯が無い。世間から見ての馬鹿は、美術家の名譽である。唯、困る事には、利口な美術家が無暗と殖えた。

■キュービズム。フォーツリズム。其他のイズムに従ふ作者の作にも、中々面白いものがある。併し、これは、彼等の理想とする、自然の實相に縛ばられざる、形線、并に、色彩の、音樂的感覚を土臺として、あつて、決して、繪として、は無い。繪畫は、自然の外形を相手とする技術であつて、何處迄も、此の範圍中に留まらねばならぬ。是等のイズム連の作を繪畫と見るのは、鯉節も未だ魚

だ、と云ふに違はん。

■満つる瓢箪に音は無い。感情に充滿する美術家に、理智の餘地ある筈が無い。美術家が理窟をこね廻す時は、それ丈感情の缺乏した時である。

■化學で造つた寶石と、天然自然の寶石を比べると、其相違は、人造石の完全な處にある。自然は常に不完全である。此不完全が物の旨味であつて、缺點の無い物に旨味は無い。此眞理は物も人も同じであつて、完全な人間などは、眞平、御免である。

■傑作は老年の作に多いと云ふ人がある。老年の作は、單調で、ヅルクて、不性である。最も良い作は、恐らく、中年の中期であらう。無論概しての事である。

■演説と製作は同じ道を踏で成功する。先づ、云はんとする種が無からねばならん。其種に對する熱心が無ければ駄目である。此二つの條件さへ満足に備はらば技巧の巧拙など云ふに足らない。美言不眞、眞言不美の眞理は、凡ての技巧にあて、蔽めて誤らない。無論、技巧にも、美はある。能辯と能筆は一種の快感を齎らす。併し、孰れも裝飾美であつて、深く肺腑を突く性質の物でない。人の魂を動かし得るものは誠實の外にない。誠實と技巧は、全く別問題である。辯舌として觀たら、今の日本畫繪かきに、聲色使ひ以上の者は尠ない。

■服裝の歴史を觀ると、飾りの念が八分で、實用二分である。此心理を認めると、袖をちぎつたり、色を限ぎつたりする事の如何

にも無意味、無効な事が解かる。人爲は、逆も、自然の人情には勝てない。

■兩極は相合す。金持ちの建てる家に碌な趣味のもの無く、貧乏人の家は、唯、家と云ふに止まる。無いも困るが、有り過ぎるのも困る。無ければ、不完全に終り、有り過ぐれば、無遠慮に出しやばる。趣味のある家は、中流の家と思ふ。

■永い傳統を有つ古國は厄介である。唯一の方法は、過去を思ひ切るにある。伊太利美術は、過去に戀着した時代は憫れむべきものであつたが、近年、歴史と絶縁して以來、大變動を起し始めた。今後の伊太利は馬鹿にならぬ。過去は尊敬すべし、決して、服従すべからず、と云ふのが、古國の人間の、何事に就ても、の肝心

な心懸と思ふ。

■人間の裸體を不禮と見るも一つの見方、美しく見るも一つの見方、孰れも眞理たるを誤らない。唯、見地の相違ばかりである。どの裸體畫も、皆、不禮と見えるのも氣の毒であるが、どの裸體畫も美しく見えるのも、困つたものである。

■獨逸では、美術にも官僚式がある。政府の建築は、大體、此式でやる。多く、ツン胴式の、ゾボ抜けた形狀である。斯の如きや、方は趣味の問題で無く、政治の手段であつて、世界統治を夢む、獨逸的理想が、威喝の一手段として、建築を利用せんとする根性から來る。

■今の日本人は、小實行を貴んで、大理想を重んじ無い。頭が悪

くて貧乏だ。目先の利益に気がついて、永遠の事に気が配はれぬ。永遠は扱措き、十年先きが眞つ暗だ。實行の背後に理想が無ければ、發達も無ければ、改善も無い。唯だ、うろく／＼と間誤つくのみで、纏まつた仕事は出来ぬ。

■外國模倣の時期は嫌やな時である。フランドル派を觀ても、伊太利亞模倣時代は耐つたもので無い。併し、後に至つてルーベンスを出した事を思へば、模倣の時期も我慢を價する。

■美術家は、大抵、算術が下手である。これは當然の事であつて、始終、想像を相手とする人間が、數の觀念に強い譯は無い。一旦、疑つた場合には、ニンが十八にも二十にも想像されるやうて無くては、疎な美術家にはなれぬ筈である。美術家の生涯は夢

の一生である。夢に常識のあらう筈が無い。レオナルドは大數學家であつた、そこが、彼の大美術家になれなかつた所以である。

■瑞寶章と云ふ勳章は、誰れ人の考案か知らぬが、確かに、一つの傑作である。其綬の色の薄す青と黄色の調和は、半ば枯れかゝつた葉の氣持を表はして、生氣の缺乏を遺憾無く象徴し、冷やかな紫色を、活氣を代表する、少量な赤色に混ぜ合はして、不得要領、煮え切らぬ精神を代表し、全部を貧弱な放線に纏めた具合は、服従、辛抱を表彰し、其能力を認めぬ勳章としては、申し分無い意匠である。唯輪として鼻にかけるに思ひ至らなかつただけは、意匠家の抜かりと思ふ。

■若し、美術界に流行と云ふものが無かつたなら、美術家に學問も見識もいらぬ譯である。處が、美術界には、絶えず、自分の確信や、自分の天分を動かす流行が起る。之を正當に判斷して、自分の規道を守るには、相當な教育や學問が要る。併し、いつそ、全る馬鹿なれば、これも安心してある。兩端は相合す。今の面倒臭い美術界では、見識を養ふか、大馬鹿か、二者孰れかを擇ばねばならん。中途半派が最も危険である。

■藝術は、結局、風土の問題である。此點から見れば、外國の模倣など案じるに及ばぬ。行きつく處に行き着くに極まつて居る。

■英吉利の偉らい處は、外國人を嫌はぬ事である。昔しのホルバイン。ヴァンダイク。トリチアーノから、近頃のサージエン

ト。ラスツロ。ハーコマ。アルマ、タデマまで、才能ある者は、悉く、自國人と扱つて、一向に平氣である。此人種的雅量は、逆も、他國人の眞似の出來た處で無い。之が爲め、英國の得する事は、非常なものである。

■凡て美術品は、賣れぬ内が華である。賣れ出すと同時に墮落する。瑞西の木彫も、印度の織物も、日本の手工品も、賣れぬ内は好かつた。一度、商人の手にかゝり、旅客の土産となり、外國貿易の代物となると、速かに墮落した。今は、振向く者も無い。

■何事にも一得一失は免れない。萬國博覽會は其開催地にとつては、有形無形上非常なる利益であるが、世界各國の層の集まるので、それ等の人間の殘して行く風儀上の害毒は、永く抜けぬ

と云ふ。道德上の微菌も病氣の微菌も、同じ原則で働くものに見える。

■模寫が原物通りに出来れば、模寫を卑下する理窟は無いで無いか、と云ふ人がある。尤も千萬な議論と思ふ。唯、模寫が原物通りに出来ぬから困る。美術品の甘味はヴォラチールな發散的な性質のものでコレと云ふて、明らかな捉へ處が無い。模寫はこれに困る。

■音響學の立場から、數理的に作曲が出来ると云ふので、作曲した。出来た事は出来たが味が無い、まるで味が無かつた。

■解毒劑や防腐劑は、相手があつて始めて眞價が出る。併し藥品それ自身は耐らぬ物である。批評家もこれと違はぬ。我等

は、御互に大黃、石炭酸である。苦がくて、臭くて、人に嫌はれるのも無理は無い。

■ある時、佛蘭西人と食堂で會つた。食卓の上に置いてあつたウースターシニア、ソースの瓶を指して、「何もかも、同じ汁をかけて、驚かぬ人間に料理は無い。料理も、茲迄来れば、もう駄目だ」と云ふた。どんな繪も、同じ表装をして氣にせぬ人間と同じく、なる程、絶望である。

■宗教では、神と自分、美術では自然と自分、孰れも私の問題である。宗教が自分、自分を離れて、宗派の教儀や、理窟の問題となり、美術が自分、自分を離れて、流派や學說の問題となると、意味も、生命も、無くなる。

■ある時、西洋の樂人が、支那皇帝の御前で奏樂した。三四曲のあとで、最初の曲を今一度と所望があつた、特に御氣に入つたのである。樂人は初の曲をやつたが、皇帝は、それと無いと仰せらる。第二、第三、全部を繰り返したが、皆異つて居る。段々伺つて見たら、最初の曲とは、調子を合せて居た時の音であつたと。|| 此話は、東西趣味の懸隔を云ふ場合に、能く、西洋人の引き出す話である。作り事ではあらうが、確かに傑作である。

■汽船の機關室を見る。ゴチャ／＼した部分が、皆動て居る。併し、其働きが、始終、同じで、一寸動くものは、永久に一寸、一尺動くものは、永久に一尺、廻るものは、廻る丈、出入するものは、寸分の伸縮なく、出たり、ひつ込だりして居る。それに、運動に道樂氣が無

い。どれもこれも、順に尻から推されて、止を得ず厭／＼動いて居る。自分は此機械を見るたびに、いつも、官吏と云ふ種族を連想をし、役人となつて居る學者、美術家を甚だ不似合な機械と思ふ。

■今では趣味も一つの専門となつた。世間の趣味を代表すると云ふ時代は、最う過去の事である。醫者に病氣を聴き、投薬を任すと同じく、畫家に、建築家に、呉服屋に、小間物屋に、指導を仰がねばならん。好い方面から観れば、發達の順序であり、悪い方面から観れば、勞働文明の結果である。

■日本人に、隙き間無く働いて居る感じは、威嚴の保存である。如何なる犠牲も此保存には提供する。これが爲に、挨拶は御不

禮、失禮御容赦、御海容御宥恕、御勘辨、いつも威嚴の破損を謝まる意味の詞ばかりで、眞の感じは無い。會ふても失敬、別れても失敬、そして、何等失敬の實は無い。此失敬本位の人間に、眞を土臺とした批評を向ける、批評家らしい批評家が、碌な往生の出来ぬのは、初めから覺悟しなければならぬ。

■文展日本畫の審査員は、何れも禮義正しい人々である。小笠原流で、鑑査、審査をやる。其、渉らぬ事と、らちの開かぬと、當を得難いは無理で無い。幕の内を覗く、十四五名の委員が、キチーンと居並び、小聲に、恐る／＼、意見みたようなものを陳述して居る。知らぬ者が見ると、審査員の百物語かと思ふ。

■住家は、畢竟、中身の介般に過ない。中身に最も適したものが、

最も好い住宅である。ある悪口屋が、富豪の新築披露に、「家も好し、建具も好し、道具も好し、これで、主人さへ取り換れば、申し分無し。」と云ふたと云ふ。住家建築の原則を喝破したものである。

■俗曲の中には、兎角、猥褻な文句が多くて、女の兒に歌はされたものでない、とは能く聞く苦情であるが、大きな男が、ドス聲を揚げて、「不思議や今までありつる女、とりどり化生の姿を現はし……角はかぼく、眼は日月、面を向く、へきやうぞな、きー」なども、全部ナンセンスであつて、今時、教育ある人間の口にすべき思想では無い。併し、音樂が意味の問題で無く、音調の美である以上、歌ふ者の考へには、殆ど影響する處が無い。俗曲をやる娘ッ兒

に淫奔者ばかり出ず、謠曲を唸る人間に馬鹿ばかり出来ぬのは
茲である。

■良い藝術品には、明らかな先行ゆきさきが無く、皆途中に彷徨して居る
ように見える。西洋人の寫した薩摩、古備前を見ると、其缺點は、
いつも、目的の明らかな過ぎるにある。タレ渤薬を使ふと、無暗に
タラす、ヒビを入れると、ヒビだらけとする。其結果、薩摩は薩摩
過ぎて薩摩でなく、備前は備前過ぎて備前で無い。眞の美術品
の美は不得要領である。不得要領だけに模倣が出来ぬ。

■流派とか様式の名稱をあてにして議論する人がある、危険な
事と思ふ。印象派とは、元と嘲弄の意味で、新聞記者のつけた名
前で、主義でも、主張でも無かつた。凡そ美術家の作で印象の結

果ならざるものは無い筈である。繪畫も人間も同じである。
正信と云ふから、正直な人間、剛太郎と云ふから、堅い人間と思は
ず、其代物で判断せねばならん。

■佛蘭西政府の美術學校に、タリー、ゾース(銅版)を専門とする
科がある。どちらから見ても、今の時世に不向きなものである
が、唯だ傳統を守る處から、瘦我慢一天張りてやつて居る。一部
の日本畫家も此魂で教育すべしと思ふ。

■美學に通じて良い作を拵らへんと企つる馬鹿氣さは、造化機
論に精通して、繁殖力を増さうと云ふ老爺の愚るかさに能く似
て居る。審美理論の智識は尠しも美慾を増すものではない。
砂糖は何故に甘きやの理窟が、優れたる菓子屋を造り出す譯で

は無い。作者の立場から観ては、美學は一の學問的好奇心の満
足に過ぎない。

■崇拜は崇拜、實行は實行である。人を崇拜すると同時に、直ぐ
自身をあて嵌めんと企つるは、獅子を見て陸に飛び上がる罽に
も似て居る。崇拜し、尊敬し、感服すべきものは無数にある。併
し、藝術家として、己の踐むべき道は一つほか無い。此道を夙く
覺れば覺るほど、美術家の幸福であり、又、力の經濟となる。

■甘つたるい食物、彩色澤山の美術品と、戀愛本位の文學は、同じ
審美的原則から出て来る。砂糖と、彩色と、助平は、人間趣味性の
初であつて、今の下劣な勞働文明の時代に、此三者の跋扈するは
當然の事である。

■水夫、兵隊、車夫、藝者、皆大酒飲みを以て充さる。人が酒を飲む
のでは無い、辛い職業が強ふる酒である。晝かき、文人の大酒
にも、亦、悲劑の潜むを想いやらねばならん。唯だ、我等横着なる
者にとつては、更に飲酒の必要が無い。横着自身一種の魔酔劑
であるからである。大酒家は、多く、氣の弱い人間に見る。

■「先生と言はるゝ程の馬鹿で無し」昔から教師は失敗者を以
て充たさる。此無數の失敗者の集合する學校を尊重する。矛
盾も亦甚しい。

■新華族、新平民、新縮緬、新ダイヤ、新の字のつくものに、碌なもの
なく、悉く、模倣の意味で用ゐらる。新らしくて良いと云はるゝ
もの、昔から言ひ傳への女房と新疊、今の美術界の新派、これも女

房には「出戻り」があり、疊には、「裏返し」がある。美術界の新派に、出戻り、裏返しが無いか。

■天才とは、自分に特殊の要求ある人、平凡とは、自分に、變つた要求無い人、自稱天才とは、他人の異なつた要求を、自分の要求かの如く見せかくる男なり。

■畫かき壞血かき、微毒かき、かき。の字のつくのに碌なもの無し、とは、故山本芳翠君の常言であつた。元と、畫かきと云ふ詞は、輕蔑の意味で用ゐられ始めたものか知らん。

■藝術家には奇人が多い。アングルは、いつも、拇指の爪を長く、鋭く延ばして居た。クールベは饒舌で、ミレリスは大聲、フェネロンは大禮服を着けねば筆が執れず、バルザックは僧服を着ね

ば仕事が出来ん。シラーは机の上に腐りかけの林檎を置いて作詩にかゝり、サツカレーはペンとインキが大嫌い。ヂッケンスは何か机上に置物を置かねば感興がのらん。佛蘭西のある有名な小説家で、汚れた手でなくては筆の執れぬ女が居る。冬は部屋の掃除、夏は庭園の土いぢり、手が汚れると同時に感興が湧き出す。今の文學者の製作のつまらぬのは、あまり人間が常識過るからである。

■工藝と云ふもので、全然、機械で出来ぬと云ふものは無い。今日では、總ての工藝が機械でやられるようになり出した。手工の前途を案ずるアル人が、手工に依らねば旨味の出ぬものは手工でやらすべし、併し機械にやらして差し支えないものは機械

に任かすべし。例えば、時計の鎖のようなものは機械にさせるがよい、と云ふて居る。解かつた話と思ふ。

■大森に行かうと云ふ人間と、横濱へ行かうと云ふ人間を集めて、會議をさせる。相方、大議論の結果、とう／＼鶴見行と極まる。これが文部省の夢む公平である。

■一生懸命の力と云ふものは偉らい。美術でも負けるものかとリキんだ結果、北米の美術は大したものになりだした。今ても、歐羅巴の何處の國に對してもヒケをとらん。あの元氣と、財力と、教育設備で、押し通したら、半世紀後の世界美術の中心は、米國となるに極まつて居る。

■人は教育で常識を養ひ、學問の力で常識を超越する。美術家

は練習で自然を理解し、趣味の力で、自然を超越する。

■個人でも、流派でも、同じである。偉大な綜合的、理想的製作を産み出すには、細心な、解剖的、寫實的、時期を経ねばならん。

■内容々と謂ふ。併し、内容は技巧でも無く、主題でも無く、作者の人格である。技巧を簡略にし、觀察を粗略にするばかりが内容の藝ては無い。内容は綿密の中にもあり、簡略の中にもあり、淡泊の中にもあり、濃艶の中にもある。内容とは作者の實價と云ふ事に過ない。

■日本人の感じは線の方に敏捷で、塊の方には遲鈍である。西洋人は、一般に、其反對であつて、塊の美の發現に於ては我等の感服するものが非常に多い。

■普通の人の翫賞は流行と云ふ事に過ない。國も時代も教育も、道德も、何もかも離れて、代物それ自身を、翫賞し得る人を、解かつた男と云ふ。

■智識階級に訴ふる繪畫は寫意に傾き、智識の薄弱な階級に訴ふる繪畫は寫實に傾く。智識によらず、唯だ美的慾望のみの満足を望む階級の要求するものは裝飾美である。

■同一の事を繰り返せば、何事も技巧ばかりとなる。三助の『ながし』を見よ。全部技巧で、肝心なアカは慙しも落ちねてはいないか。

■國としては、政治的獨立、個人としては、經濟的獨立が無くば、趣味の獨立は無い。

■印象派以前の印象的大家——ヴェラケス。ゴヤ。レムブラン。ド。ハルス。クロード、ロラン。コンスタブル。ターナーなどが、悉く驚くべき技巧家であつたと云ふ事は、面白い事實である。

■人種の特徴を知ると云ふには、其人種の中のある偉らい少数の人から判断は出來ず、専門家ばかりでも解からず、人種全體の瑣末の表現の中に發見せねばならん。佛蘭西人の美的感情の癖なども、唯だサロンの出品では解からず、日常生活、彼等の全體を支配する嗜好から觀ねばならん。

■他人の感情を感ずるには、此方に、感じ得る丈の力がなければならず、其感情を知るには、又、それ丈の理智が入用である。感情を感ずると知るとは別問題である。他人の最愛の妻子の病死

を氣の毒と思ふは、他人の感情を知るのであつて、感ずるのでは無く、屁を嗅いで、クサイと思ふは、屁を感ずるのであつて、知るのでは無い。美術の批評家には、智感、兩方の力が充分になからねばならん。

■英吉利人は大體馬鹿だと思ふ。佛蘭人は一體に利口だと思ふ。併し、英吉利の多方面を支配する四五十人の偉らい人物が佛蘭西に居るか、どうか。

英國の國士と美術問題

■明治四十四年に組織せられ、カーゾン卿を委員長とし、サー、エドガー、ザキンセント。アール、エチ、ベンソン氏やサー、チアールス、ホルロイド等を委員として包含するナショナル、ガレリー委員會は、四月下旬に其報告書を發表した。此大亂中にも美術の問題を閉却せず、戦争は戦争、他の事は他の事と、各部署が各々其受持の事柄に當つて、一絲亂れざる有様は、道がに大國の態度と感服の外はない。

■此委員會の目的は、數年來、兎角、英國内に在る名畫が、歐米各所

の美術館に購ひ去られる形勢が見えるので、英國所在の美術品が、斯う奪ひ去らるゝを、如何にして防禦するか、其方法を調査し、又、實際、如何なる名畫が持ち去られるかを取調べると云ふのであつた。

264

■今此報告に據ると、過去數年間に於て、英國内各所の私有蒐集の内から國外に流失した傑作の數は、中々の數である。レムブラントの作五十二點。ルーベンス、二。ザアン、ダイク、二十七。ホルバイン、十。ゲインズボロ、二十九。ターナー、十三などが其眼ぼしいものであつて、是等の大家以外の製作の運び去られた物も多いに相違ない。而かも、其内の有力なるものは伯林のカイゼル、フリードリッヒ美術館、同じ市の國立美術館と、紐育を

始め北米各地の小都會に持ち去られたのであるから、英吉利の國士が憂へ始めたのも尤な事である。

■總て美術品は、金のある處に留まると云ふのが原則である。略ぼ此の金の勢力と同等と見るべきものは、愛護の熱心であるが、實際の狀況を観ると、此熱心の力も、金には敵はぬかと想はれる。約四年前、ロイヤル、アカデミーの宴會席上、バルフォア卿の演説は、此邊の事情を能く説明して居る。卿の云ふには、伊太利亞で制定し、現に、實行しつゝある國寶流失防止法は甚だ無理窟である。近來、英國所在の美術品が米國人の爲めに買收されるを非難するは、甚だ無意味なる事であつて、今英國より持ち去られつゝある伊太利亞、佛蘭西、和蘭土、獨逸の名作も、嘗ては、英國

265

が金力を以て奪ひ來つたものに外かならない。古美術品賣買界の法則は極めて單純なものであつて、古大家の傑作には數の限度がある。之を所有せんとする個人或は國家の慾望の高まるに據つて、其價格は益々騰貴する。そして常に最も高價を拂ふものゝ手に歸着するに極まつて居る。ナショナル、ガレリーの現在美術品購入豫算は、一年五千磅である。此資金は、四五十一年以前に於ては、或は不足で無かつたかも知れぬが、今日では、殆んど滑稽の程度に足りない。英國貴族の祖先は、祖父母の肖像を描かすに、僅かに、百磅、二百磅を拂ふに過ぎなかつたが、其等の肖像は、今、二萬磅の高價を以て畫商に購はれつゝある。二萬磅の價は、八百磅乃至一千磅の歳入に當る。過重なる財産相續税

に苦みつゝある、英國の貴族が、空しく名畫を收藏する事が出來ぬも尤の事では無いか。——との筋であつた。

■美術品愛護の熱心は、間接の力であつて、直接の力は金である。處で、今度、委員等の發表した、此の購入基金の産出方法として、案じ出された條項中の最も重要なものは第一、英國政府は、現時政府から附與しつゝあるナショナル、ガレリー購買豫算年額五萬圓を最低金額二十五萬圓に増加し、尙、特に重大な國寶購入の必要起る場合にも、臨時費を請求し得る事、又、豫算金額にして、其歳以内に消費されぬ場合には、國庫に返濟の義務なき事、第二、政府にして此増額金全額或は其一部を附與し難きか、其場合に於ては下の方法に依つて資金を得る事、(一)一般の美術品競買から

生ずる總賣上げ高に對して課税する事、但し各競賣に對し一定の標準價額を設け、之れ以上に上りたる賣上高に對して賦課する事。税金は、競賣執行者より國庫に支拂ふ可く、税金の取り立てに就ては、賣方の負擔とならざるよう充分の取調べを行ふ事。税金から得た収入は、其収入を生じた美術品の種類に應じて、各種の美術館購入資金に分配する事。(ろ)相續税金の内、美術品に對して賦課したるものは之を別にし、別に記録して、此收入金を各種の國立博物館美術館の購買資金に充つる事。(は)ナシヨナル、ガレリー並びにテート、ガレリーの入場料並に目錄、寫眞の賣上歩合より得たる収入は、之を同館評議會の手に收め、國民の爲獲得する美術品購入資金に充つる事である。尙、此案以外に、美

術後援會(フレンツ、オフ、アート)を組織して、國寶の流出防止に充分の力を注ぐべしと云ふ重要な條項をも容れてある。委員の報告は、全部三十五條の内に概括され、其内には、美術品國外流出防止に就て、現時、伊太利亞政府の執りつゝあるが如き法律、制定の不可なる事、美術品國外流出税法の好ましからざる事、國內に於ける美術品賣買に就いて印紙税を取り立つる事の又、宜しからざる事を斷言し、別に、數十項に亘つて、現美術館、博物館管理法、組織法に就いて根本的改善を促すべき案件を發表して居る。■自分は、此英國保守黨の首領と目指さるゝカーゾン卿の周到なる英國美術館改善案を觀て、我國にも此の如き良案の顯はれん事を羨望する念は起らぬ。羨望したいにも、未だ國家の美術

館なるものは、廣い日本に、一つも無い。眞に、一つも無い。帝室の御物を保管する外他意無いと公言する吏員に依て經營する二三の博物館はある。併し、國家の經營に係る美術館或は博物館なるものは、唯の一つも無い。最新國と輕視さるゝ北米には、一百十九箇所の美術館がある(大正元年調)而かも此多數の美術館は悉く、私營のものであつて、國費を仰て居るものは一箇所もない、驚くべき事實では無いか。佛蘭西は、無數の地方、中央美術館の外に、現に此大亂中にも拘はらず、ゴブランの製絨美術館の新築を引續けて、昨今竣工に近づきつゝある。獨逸も亦、在來の豊富な美術館の外に、續々美術館の新設をやつて居る。現に、本年三月ツツセルフドルフ市會は約一百万圓の經費で市美術

館の新築を決議した。伊太利亞の北亞弗利加發掘事業の如何に勇ましく其效果の如何に大なる。此大戦を好機として伯林美術館のボーデ博士等が如何に古畫の購入に盡力しつゝあるかは、殆んど眼前に其盛況を觀るが如くである。併し、我國には、名畫を手に入るゝも、其容るべき美術館は一ヶ處も無く、發掘すべき支那、印度は眼前にありつゝ、皆歐人の手に收められ、歐米人の美術館改善案などは模倣しようとしても、未だ其物が無い。模倣だも出來ぬとは情けないで、事では無いか。

■併し此委員の報告に接して、自分が羨望し得るものがある。即ち英國政治界の大人物が、國家の爲めに美術の問題に頓着する美風である。自個々人の趣味の厚薄は別として、自己の占む

る重要な地位を能く自覺し、平素は、唯だ、政治社會の問題にのみ握捉するかと思はるゝ國士が、一旦、國家の問題として現はるる場合に於ては美術と云ふが如き、一見縁遠き問題にも、總身を上げて盡力する事の美風である。

■大正二年の英國上院議事録を見ると、四月二十九日の下に、大英國博物館並に博物學博物館に於て實行し、極めて好成績を收めた、館内無料説明者設置の例は政府に於て、ヱイクトリア、アルバート美術館を始めイムベリアル、インスチテュート、ナシオナル、ガレリー等にも設置すべき考なるか、然らば、何時其實行に着手すべきかとのロイド、スードレーの質問に就いて、英國政界名士の賛成演説が載せてある。之を観ると、英國の政治家が、美術

なる問題に就て、如何に周到なる思慮を拂ひつゝあるかは明瞭である。ロイド、スードレーの演説は統計から、又、美術館、博物館設置の目的から、觀察した、極めて周到又聰明な、説明であつて、斯くの如き演説者を有つ美術界は幸福と云はねばならぬ。スードレー卿に次で、ロイド、ヱーシの賛成演説がある。グレイ伯は、先づ、美術館並に博物館をして、社會公衆の興味を惹起するに至らしめたスードレー卿の成功を祝し、全然、スードレー卿の意見と一致する旨を述べ、大英國博物館とサウス、ケンシントン工藝美術館の間には、公衆人望の上に非常なる相違がある。之は前者に於て開講する日々の講演の結果であつて、此好例は、是非とも後者にも施さねばならぬ。政府は、此計畫の實行に就て必要

なる少額補助を支給する者との我等の確信に對し上院に相當の獎勵を與へられん事を希望するとの節である。グレイ伯の後に、ロード、リーズデールの此計畫實行に就ての實際的困難に關する精細なる説明演説あり、ロード、グレッヰキルはロンドン市會教育委員の資格を以て、動議に賛成し、ロード、レイは工藝美術館贊助委員は、目下熟議中なるを以て、早晚原案提出者の希望を充す可き結果に至るべしと云ひ、ボーシアンブ伯は、此の問題に就き市の各團體の意向を聞き糺したる所、大部分は、其效果の、下附金額の如何に依るものたる事を確め得た、説明案内者の必要は、觀覽人の性質、即ち學生なるか、普通の觀覽者なるかに依つて別かるゝ問題である云々と、稍躊躇した演説を爲し、最後に、ロ

ード、エモットはイムペリアル、インスチテュートの顧問委員を代表して、一二名の案内者を設けたきも、其費用に窮すとの言譯を發表して居る。

■自分は、近頃發表せられた購入資金設備案に接し、又、此議事録を想ひ起して、カーゾン卿の如きグレイ伯の如き或はバルフォア氏の如き英國第一流の政治家、國士が、斯く、美術の問題に干與するを觀て、誠に羨望に堪えない。斯くの如き人物が美術に與つてこそ、一年、約一千万圓の英國美術費豫算が提供されるのである。斯くの如き熱烈なる國士の贊翼あつてこそ、國家的大計畫が美術界に實行されるのである。

■國家經營の一美術館をも有せず、美術教育機關として全國唯

一の我東京美術學校を文部省直轄學校中、尻より第三番に置いて(最後は盲啞學校、次は音樂)一向に意にせず、而かも、年々、卒業式場に、「美術は國家の精華なり……諸子努めよや」の式辭を、オトマチカリに讀み上る文部大臣を戴き、私有の爲には、泥棒も辭せず、然れど、國家の美術事業に就ては、毛頭の興味も無い美術元老、富豪を有する我國は、今の世界の美術界に於ては、下々の又下なるもの、美術を無視する國家としては、世界一等國の頭領である。

■總ての問題は人物である。我美術界の弱點は、碌な人物の居らぬ事であつて、團體、協會、學校、官私さまぐの機關があつても、眞に國家社會の美術事業に理解もあり、熱心もある者は、殆んど

無い。其上方に座つて先導者然たる者も、大々部分は、役人として地位の變動にビク／＼し、愚昧にして目前の私利に汲々たる美術家中の親方株を喰ひ合はして、漸く安靜を保たん事のみに腐心する三流四流の人物である。如斯き下劣な人間に依つて國家的美術施設の計畫など立てらるゝ事は、思ひも寄らん。我朝野の第一流の人物が、英國の如く、美術問題に干與するに至る事は、自分の活きて居る間には來ぬ。恐らく、永世に來まい。

統治思想と今の美術界

■美術問題として、近頃最も面白く思はるゝものは、今春、米國に

現はれた米國文藝美術院法、人團體請願拒絶事件であつて、時代の精神を看取するに就て、最も興味ある現象と思ふ。

■拒絶事件とは斯うである。先年、北米の重立つた文藝美術家が、歐洲各國に、永い以前から創設されてゐる文藝美術院に倣ふて、米國文藝美術會院なるものを組織した。近來漸次組織の堅まるにつけ、同會を法人團體とせんと、計畫起り、現大頭領ウイロン氏や前大頭領ルーズヴェルト氏を始めとし、現時、米國文藝美術界の巨星の連署を以て、其請願書を下院に提出した。處が、下院の南部並に西部選出議員は、此如き階級的傾向の組織は、危険であると認めて、請願を否決した。

■事件はこれ丈けてある。併し、此現象を以て、民主的米國には、

普通在り勝ちの事と見做すは、餘りに輕卒である。事實は歐洲に於ても、永き過去の傳説にも拘らず、文藝美術院の勢力は、年々減殺されつゝあるのであつて、目下、英國美術界の大問題となりつゝあるシアントレー遺金の使用法に就ての喧ましい議論もロイヤルアカデミーの威望の衰へた事實を證するに過ぎない。世界何れの方面を見ても、今の美術界は趣味の上に主權の必要を認めない。指導を仰が無い。趣味の事に就ては、一切指圖の間敷指導を受けたく無いのが、幸か不幸か、一般美術界の傾向であると思ふべきならぬ。

■英國には、先年、佛蘭西風の美術行政機關を設けて、英國の一般美術事業を統括する政策を實行せん目的を以て、イムペリアル、

アート、リーグなるものを組織して、現に、此會は雑誌などを發行して、此行政的思想の普及に努めて居る。併し、此の理想に對する反對者は中々に尠く無い。而かも、其反對者は、恐らく、ローヤル、アカデミー會員に多からう。彼等の反對説を聞くと、其最も有力なる理由は、絶えず更代する政治界と美術問題を連結するの危険に對する恐怖と、趣味の問題に就て政治的名聲或は勢力ある素人の干涉の齎す悪影響、或は官吏の權威を藉りて、少數者の趣味に同情し、その獎勵に偏して、美術界全般の發展を無視し、自づから種々なる偏頗と不正を齎らす弊害などであつて、彼等は、斯の如き實例は、佛蘭西に尠く無いと云ふて居る。

■是等の事實と、近頃、歐米各國の美術界に現はれる、雜多の事實

とは、國家、社會として、普ねく、美術の發展、改善に關する施設は、別として、個人の趣味に關しては、其發所の個人たると、官吏たると、政府たると、團體たるに拘はらず一切の干涉を排斥すると云ふ思想の、美術界に勢力を占めつゝある事を證明するのである。

■此事實を知悉する論者は、先頃發表せられた美術審査委員長武井男爵が、昨年の文展日本畫審査委員に向つて、送つた通牒なるものに對して、如何なる感想を抱くであらうか。少しく心ある者は、我文展の組織の上から、今の美術界の心狀から、又今の社會の要求から批判して、随分、面白い通牒と合點したことを疑は無い。

■文展の組織と、委員長の立場から觀て「文展既往の成績に考へ

將來の希望を陳ぶるを適當と考ふる事が問題である。武井男個人としての希望を、全然私的に發表するは、兎も角、委員長なる地位と、其役割りから觀ては、決して適當で無い。のみならず、審査員の統率者として、ある一定の趣味的標準を斯く公的に附與する事は、明白なる選抜干渉であると同時に、決して委員長に與へられたる權限ではない。「畫面の廣大」「色彩の絢爛」「類型的作品」「取材の類似」を嫌忌して「淡彩畫」「畫趣饒かなる小品畫」を重んずると云ふ委員長の方針は、鑑査、審査の際、廣大な製作や、色彩本位の作品や、取材類似の日本畫が排斥せられ、淡彩に偏頗になるべき傾向を生ずべきは、官邊に縁深き人々を恐怖する惡習の強き我國に於ては、明白である。作の大小、色彩の濃淡、取材

の類似などは、無論優劣の標準では無い。のみならず、是等の方面の問題は、全然、作者の趣味に放任せらるべきものであつて、外部から、殊に委員長に依つて希望さるべきものではない。作者は自己の趣味を代表する作品を提出し、鑑査、審査委員は、自己の力量に依つて鑑別すると云ふ、以外には、何等の道は無い。これが文展の組織であつて、これ以外の處置は、悉く、文展組織の變動を意味する。文展は、作の大小、色彩の濃淡、取材の變類、悉く、一視同仁すると云ふ、約束に依て成立して居るのであつて、ある一派、一類の趣味を獎勵すると云ふ事になるに於ては、文展の意味は、全く變動するばかりで無く、偏狹な希望や方針を抱く委員長の下には、無論、偏狹な審査員のみ集合する道理であるが爲めに、自

由公表を理想とする文展は、唯だ少数なる一味黨派の作品陳列場と成り了るべきは明らかである。

■文展の如き自由公表の組織では、審査員の判断が最前又最後であつて、審査員以外には、何等の權威も存在せぬ筈である。通牒の内に憂慮せらるゝ、畫面を廣大にし、或は色彩を絢爛にして衆目を惹き易きものを出陳せしめた者は、過去文展に於て其衝にあつた審査員の所業である。畫趣饒かなる小品畫を觀賞する事殆んど不可能なるに至らしめた者も審査員に相違無い。設備の區別廣濶にして壁飾に強烈な色を用ゐて、大作出陳の趨勢を助長した者も審査員である。取材相類似する物を少なからず選擇した者も、亦無論、過去の審査員の所業でなからねばな

らぬ。審査員が、選抜の全權を附與されて居る以上は、文展の成功も不成功も共に其責任を負はねばならぬ。武井男が過去文展の成績に就て非難するは、即ち過去の文展審査員の判断と、趣味を非難するに外ならぬ譯であつて、若し、審査員にして、廣大な畫面の製作を排せん事を望み、色彩の絢爛を退治せんとし、或は、雅趣饒かなる小品を奨励せん事を希望したらんには、自由に之れを爲し得たのであつて、彼等を緊束するものは何物も無かつたのである。我輩は過去の審査員が、自己の良心に反して、廣大な製作、色彩本位の作品を選抜した者とは思へ無い。相當なる責任を以て、文展に出陳する丈の藝術的價值ある者として認識採擇したるものと信ずる。

■故に、此見地から觀察すると、武井男の通牒は、審査員の不心得に對する譴責状とも觀られ、或は審査員に對する命令とも觀られ、或は審査員の自由選抜の束縛とも觀られ、或は、過去審査員中の一部の主張に助力するものとも思はれる。何れにもせよ、既に選抜に對する全權が審査員に委ねられある以上は、色彩も、面積も、小品も、淡彩も、委員長の希望し或は指圖すべきものではない。無論、自由なる審査員に對して、注文が間敷希望を披瀝すべき者でも無く、一般美術家に對して彼等の思想、彼等の確信、彼等の趣味を、少しにても曲ぐべき恐れある希望を公表すべき役目は寸毫も授けられて居らぬ譯である。

■舊式なる統治思想を懐く人々には、兎角、自己と、自己と、趣味、思

想を同ふする少數の人間を標準として、總ての人間の趣味を統治一括せんとする傾向が強い。此種類の人々は、異性の趣味を翫味する力が薄い。彼等は多く、封建時代の統治を夢見る、古る臭き人間であつて、一片の訓令、一封の訓示が實行の效力あるものと未だに信じて居る。併し、今の時代は、杓子定規では行かぬ。凡ゆる美術界の現象は、其の背後に深き原因のあるものであつて、唯一口に、弊害と擯斥し了る事は出来ぬのである。例へば、畫面の廣大に就ては、其陳列場の尨大にして、シマリ無く、恰も馬小屋に公展するが如き周圍の境遇が助成する處もあるには相違無いが、併し、文展の如き、巨多の觀覽者を吸集する催しは、雅趣豊かなる小品畫の觀賞には、全然適當した場所て無い。僅か三十、

四十日の間に、十四萬二千人の觀者を引き寄する展覽會か、八疊十疊の座敷に、靜かに翫賞さるべき「雅趣豊なる小品畫」に適當した場所て無い事は明らかでは無いか。今の展覽會なるものは、殺風景な西洋から傳來したものである。貴賤貧富、趣味者も無趣味者も、雅者も俗物も、肩摩雜沓の間に、現時の美術品を見物に蟬集する場所である。此停車場の如き展覽會を一種の茶室の如く心得、雅味、淡味を獎勵せんと企てるは、恰も、軍樂隊は殺風景なりと排斥して、戰場に、一中節を合唱さすると同じであつて、場所異いの企たる事は拒まれ無い。

■茶室が、茶室向きの畫を生じ、書院が書院向きの製作を起すと同じく、展覽會が展覽會向きの製作を呼び起すは當然である。

文展の勃興と共に所謂文展向きなる製作の現れた事實は、一方から觀れば、未だ我美術家の趣味性が、相當なる反撥力を有する實證であつて、喜ぶべき現象であつて、一概に弊害など云ふべきものでは無い。若し、文展に、寺の本堂に相當し、大名の座敷に調和する製作のみ現はれたらんには、それこそ、日本人の美術心は絶望である。展覽會は展覽會であつて、座敷に懸けらるべき小畫の勸工場ては無い。武井男の將來に向つて希望さるゝ如き日本畫が、今の時代に於て、又、文展の會場に於て、會場設備の改良と共に現はれ来るか、どうかは興味ある疑問である。併し、萬一、男の希望の遂げ得られたる日あるとせば、其時こそ、文展の勢力消滅の日である。新らしき時代が古るき時代に屈服し終つた

時である。

■色彩の絢爛に就ては、尙深き理由があつて、決して、衆目を惹く爲めの陋劣なる作者の心事のみの結果では無い。凡ての美術品、殊に、繪畫が、殆んど色彩本位となり來つたものは、現時の世界的趨勢である。今の美術は色彩の美術であつて、此方面の特色を除ては、現時の繪畫は何等の意味をも存せぬ。若し、二十世紀初期の繪畫なるものが、遠き未來に於て、認識さるゝものとせば、必らず、其自覺的色彩研究にあることは疑無い。色彩を重んぜざる時代の趣味に養はれたる者の眼から見ても、此時代の特徴は一つの弊に過ぎ無い。併し、新時代のものにとつては、殆んど唯一の生命である。其原因は雜多であつて、茲に詳説する邊は

ない。科學の壓迫、社會有力階級の異動、經濟狀態と民主的思想は悉く、繪畫を色彩本位に壓迫する。新時代の思想に觸るゝ作家が色彩本位に傾くは、順當なる事と云はねばならぬ。

■個人の趣味からは大いに武井男に同情する。併し、委員長の立場と、文展の性質と時代の精神から觀ては、今回の通牒は、羊の皮を被たる狼で、一種の干渉を意味し、文展の自由を破壊する危険あるものと斷言するを憚らない。

文展審査員の撰擇

■若し世の中に、審美計とも云ふべきものがあつて、溫度に對す

文展審査員の撰擇

る寒暖計の如く、目方に對する天秤の如く、技巧の優劣や美的感覺の性質と深淺或は模倣の分量と獨創の割合を、寸毫の誤りなく、明確に測り得る機械があつたとすれば、美術審査員など云ふ者は、全然必要無い譯である。併し、斯の如き器械の無い以上、非常に不完全なるものながら、人間を以て此の器械の不足を補はねばならぬ。之を例ふれば、石炭の買入れに付て、最も目方の感覺到敏捷な人間を集めて、それ等の人々に、互に、想ふ所を打ち開けさせ、甲説乙論、其長短を差し引き平均して、可成、其實際の分量を判断せしむると同じであつて、其方法の不完全なる事は云ふ迄もない。方法の不完全なるだけ、それだけ、人間の撰擇に忠實でなからねばならぬ。審査員の是非共具備せねばならぬ條件

は、技巧に對する智識と、美的感覺の鋭敏の二つであつて、此二條件を最も完全に備ふるものが最も適當な審査委員である。其實際の職業が技藝家であらうが、或は鑑定家であらうが、専門家であらうが、素人であらうが、それは問題でない。如何なる職業の人にしても、人間として、最も聰明に、最も有力に、此の二條件を備ふる者は、最も適當なる審査委員である。理窟から觀ても、實際から觀ても、始終、技巧と美感を相手とする美術家が、此二條件を具備すべき筈の者である處から、普通、美術家の間に此種の人間を求むるは當然である。併し、決して、其原則では無い。

■併し、若し、不完全なる人間を煩はす必要なく、完全なる審美メ
ートルなるものが、現に今の世の中に存在して居るとして、扱て、

我が文部省の美術審査委員選擇掛が、その如きメートルを採用するか、どうかは、大なる疑問である。文展出品の作品の鑑別する美術審査委員なるものは、單純なる作品の審美的審査のみを目的として選擇せられたもの、即ち、正直、明確なる無心のメートルを理想として、其代理を勤むるに最も適當なる人間を標準として選擇せられたもので無く、撰拔の根底には種々複雑した不純なる人間的、社會的、動機を含むて居る。多衆愚物の歡心を買ひ、利害關係のほか何事にも頓着せぬ頭株の平和を追求すると云ふ事は、それ自身に於て、既に理想的審査を無視して居るのである。此不純なる分子の存在は、委員の選擇から出發して、文展の各方面に波及し、あらゆる不純と無意味なる現象を惹き起さ

ずには措かん。卒直、無心なる審美メートルは複雑した人事の問題に讓歩し、時の便宜を唯一の標準として進退する當局者の意向を迎合し得る者で無い限り、到底、如此き注文に耐へ得るものではない。文部省の思ふが儘に上下、高低するメートルなれば兎も角、常に、審美的含蓄程度を指示する正直なるメートルは、迎も、御採用に相成る事ではあるまい。

■不純なる動機とは何であるか、其の第一は、文展なる一種の見世物の興業主、勸進元として、政府當局者が出品物の多からん事を希望するの念慮である。此念慮を根底として、自づから現はれ来る第二の念慮は、各党派をして、可成、平等に、文展なるものを認識せしめんとすることである。第三は、官僚黨與に離れ難い

同種族を以て團結せんとする努力である。第四は、當局者の最も恐怖する、彼等の澤庵石なる貴族院或は官吏として其位地を保つに就て歡心を買はざるべからざる權勢ある人間に對しての、遠慮と退從である。是等の種々なる原因は、互に交叉して、文展經營の各方面に活動するは勿論、殊に、其最も肝要なる審査委員の撰擇に就いて顯著なる働きを爲すものと認むべき理由がある。

■過去七八年間に於ける文展審査委員の變動を觀るものは、當局者に於て、或る一定の主義なく、精神無く、全く時の便宜に従つて、一時々々の安息を保たんとするに汲々たる實證を認め得るであらう。日本畫部を新舊二科に區分し、之に所屬する委員を

別に任命した事は、當局者の大成功として誇りつゝあつた所であるが、其俄かに廢止せられたる處を以て觀れば、初から左程の定見と確信あつて分科せられたる譯でない事は明らかである。其廢止を以て、世間に噂する通り、洋畫部二科設置運動に對する申譯とすれば、如何にも其自信力の弱いと、日本畫審査なるものに對しての不誠實なると不親切なるに驚かざるを得ない。邦畫の審査に就て、是非共新舊二科に區分するを必要と認めたる以上は、何處までも此方式に従ふべきが正當である。分科すべき公明なる理窟無く、分科し、廢止すべき正當なる理由なく廢止する、其譯も無く、改廢する一種の心理作用は、文部省に關係ない普通人間の到底解し難い處である。所謂學者連なる審査員は、

實技家が、兎角、學識に淺く、理窟に疎く、黨派心に強烈にして、やゝもすれば、不公平に陥り易い、其缺點を補はんとして、附加せられたものである。其精神は確かに正當である。殊に、政府買上品選拔の如き事柄に於ては、師弟關係を超越する中立的委員の努力に持たずば如何なる結果を持ち來すかは、殆んど推測の餘地も無い。然るに、之も、俄然廢止された。過去八年の間に、實技家が學識を養ひ、理窟に通じ、黨派心を失ひ、公平となり變つたにつき、學者連の必要の認められなくなつた爲か、それ共、初めから、左程の定見無かつたものか、或は、實技家の壓迫に敗北して、今から、無識、不理屈、不公平に放任するのか、兎に角、文展審査に就ての、此ブレーキは解除せられた。若し、當初の精神を以て、審査に必要な

る條件であつたとすれば、今後の審査は暗黒であると認めねばならぬ。一時、二等賞受領者から、審査委員を撰擇する方針を取るが如く見えた。結構なる、又、解かつたるやり方と思ふた。併し之も束の間、速かに廢止されたるは問はずも、其一度任命したる審査委員を、再任せざるに至つては、實技家たる審査委員の場合に於ては、殆んど人權を無視せられたる仕打である。文展受賞の問題さへ、實技家に取つては、死活の大問題である。幾年となく審査委員の地位にありたる實技家が、俄かに其の任命を失ふ事は、中々以て、受賞どころの程度ではない。實技家に取つては、殆んど自殺を値する災厄と云ふて過言であるまい。我等は、是等の審査委員が、斯の如き重もき懲罰を蒙るべき何等の理由

も發見し得無い。全く審査委員撰擇者の無定見、無理想の犠牲である。最も面白くも、不可思議なる現象は、二三年前、貴族院議員より二三の政治家を引出したる事であつて、美術審査選任の便宜主義も茲に至つて、其絶頂に達し、最早、あらゆる曲藝の種切れとなつたものか、不理屈、無定見の勸進元と認むべき委員長は、突然、スツボンの中に隠れ、現れ出たる後任者が現任委員長である。

■委員選拔に就て、審査メートル代用の理想を缺き、眞の審査を夢想せずして、不徹底なる人事的、官僚的、黨略的、動機の活動しつつある事實は、本年任命せられたる委員に就ても、易く認める事が出来る。學者の審査員を廢すると唱へつゝ、今泉氏の日本畫

部に加はり居るは、過般、氏を博物館より出したるに對しての一種の慰藉との取汰沙は、役目のやり取りを一種の菓子折の如く考ふる日本の役人には、始終、有り勝の事であつて見れば、全く根據の無い事でもあるまい。二部に森氏の存在も、學者廢除に際しての矛盾との説もあるが、森氏、或は平山氏は、當局に於て學者と認めての事であるまい。兩氏實際の役目は、政府のエヂェントであつて、英國殖民地のガヴァナー、ジエネラルと云ふ處であらう。無論、無用の椅子たるに相違は無く、各部委員の互選に依つて、此仕事は簡單に出來得べき筈である。日本畫部の委員は、新舊、東西、二方面から、思案選拔されて居ると云ふ事であるが、果して事實とすれば、一は、時間的、一は、地理的標準であつて、孰れも、

審美メートルの微細だも關係ある問題では無い。如何なる完全なるメートルにも斯くの如き審美に縁遠い問題の測定は出来ぬ。此邊が委員選定動機の不純なる處である。第二部洋畫部選抜動機は、不相變の黨派本位である。消滅したる白馬會と僅かに殘骸を留むる太平洋畫會とは、世間の最早認識せぬにも拘はず、獨り文部省のみは、其争鬭を憂ふると見えて、四人の三人萬一の場合には部長を加へて、同數を保たんと云ふ趣向と見える。此現存せぬ黨派本位も、メートルに何等の關係も無い。唯だ黨派の主張に重きを置く方針なれば、吉田博、鹿子木孟郎の二氏を除外したのは、非常なる手落ちてある。凡そ、審査の目的を以て純然たる黨派の問題と心得、自黨の利益に關して、總身を

捧げ、美事なる奮闘を續けたる事に於ては、今の太平洋代表者中、此二氏の足元へも寄り附き得る委員は無い。若し又、技倆と美的趣味力を標準とすれば、中村、中川の二氏を置き据ゑ、昨年より新らたに藤島滿谷の二氏を入れて、中澤弘光、山本森之助の兩氏を故更に除外した理由を解し得ぬ。審美的方面を疎外し、單に黨派的均衡を主標として選抜した事實は、何處までも争はれぬ。第三部彫刻に至つては、抱腹絶倒である。白井雨山氏が朝倉、小倉、北村諸氏の製作を判定するとは、氣狂沙汰にあらずんば、甚くとも、滑稽である。斯の如き狂言を、平氣になつて爲し得る委員選抜掛は殆んど如何なる馬鹿をも爲し得る譯であつて、當局者の無能と無智と、眼中、唯だ黨人あつて、美術の審査なるものに對

して、一向誠實なる思慮無い事實は、未だに、此拙劣なる技巧と趣味無き頭腦を以て顯著なる雨山氏の任命の一事に依つてのみも知り得る筈である。高村氏に至つては、森、平山の二氏と同じく、ガザアナー、ジエネラルの役目である。否、一步進んで、彫刻部全體の審査請負師である。曲がりなりにも、ロダン。ムニエーを師とする作品の饒多なる今の時代に、佛師の一派に、怪げなる趣味と、甚しく素養の缺乏せる新海氏なる西洋式彫刻代表者一人を加味して、此部の審査を完うし得ると考ふるは、殆ど、本氣の沙汰とは受取難い。自分は第三部委員人選の動機を、關係者の私情と斷定するを憚らない。

■文部當局者に向つて、注文したい事は審査の問題を今少し異

面目に考ふる事である。審査委員を以て、審査メートル代用と心得、下らぬ黨派の問題や、政界有力者の干渉や、出品の減少や、美術家の不平に顧慮せず、美術に關する朝野人物中の最も適當なる人物を選抜して其局に當らしむる事である。不純の分子を一切放棄して、純然たる美術審査を理想として、何處より見ても、選拔者の良心に耻ざる委員を任命して、突進せんには、出品者の減少毫も恐るゝに足らず、黨派の不平、何等顧慮する必要はない。良心を本意として忌憚なく判斷する委員を信頼して出品する少數の展覽會は、情實に依つて選ばれたる委員の選拔に預つた多數の展覽會よりも、遙かに有效なるは、改めて云ふ迄もない。今の官吏に向つて良心云々は或は時勢後れの注文なるやも知

れぬ。改めて云はん——單に事業經營上、日本國民の租税の一部を消費する文展の發展、成功上、最も確實、有效なる方法は、凡ての不純なる顧慮を棄てし、一意専心美術品の判斷に最も資格あり、最も誠意ある、人間を撰擇するにある事を。

大局より觀たる今の日本畫

■近頃の新聞に登載せらるゝ美術に關する記事の中、我等の注意を惹くものは、桑港大博に於ける我美術界の不評である。ある通信者は、同博に於ける我洋畫を以て、フイリッピンの出品同等と慨嘆し、他の者は、美術部出品全部を以て一の國辱と認むべ

き程度に劣等なるものと憤慨するなど、何れの報告に接しても、悉く悲觀的なるもののみであつて、未だ一つとして、我等の自負心を喜ばすべきものはない。殊に、是等の不吉なる評判に裏書する有力なる報告は、此方面の批判に就て最も信頼を價する、同博萬國美術審査委員たる久米桂一郎君の報道であつて、「日本部は如何にも憐はれた」の一言は、簡單ながら、我出品の實狀を言ひ盡したるものであつて、殆んど樂觀の餘地はない。同博の我美術品が、甚だ劣等なるものである事實は、最早疑無きものと認めて差支はあるまい。

■併し、今回出品せられた美術品が、其品質に於て、我が現代美術の最高程度のものであるか、能く我美術の粹を代表し得るもの

であるかは大なる疑問である。我國の萬國博覽會に對する美術部組織の方法は、外國のそれと比べて根本的に異つて居る。我國では、大體に於て、未だに個人出品本位であるに反して、外國では、國家民族本位の出品法に據つて居る。歐米諸國が世界的博覽會に對する覺悟は常に國民的、國家的であるが、殊に、美術の方面に於ては、此覺悟が一層に熾んであつて、彼等は、漠然と、一般畫家よりの出品を待たず、美術界の事情に精通し、近き過去に於て製作せられた代表的製作を知悉し、又それを鑑別し得る力量ある人物を集合し、或は斯の如き實力ある團體に命じて、進て、現時代の最高程度を代表する製作の集收に努力せしめ、其作品の私有に係るものは、一時借入れ、代表的作家には、特に製作を勧誘す

るなど、凡ゆる手段を盡して、能く、時代の最高標準を指示するに足るべき出品を、云はゞ、主觀的に組織するのである。之を我が政府の、御役目一遍、隋氣滿々たる官吏の遣り口と比べては、雲泥の差と云ふが如き手ぬるき文句では中々以て形容しきれた譯で無いのである。

■斯如き事情から、桑博に於ける我が出品物が、歐洲各國のそれに比べて甚だしく劣り、見をぼらしく見ゆるは怪しむべき事て無いと同時に、現時の我が最高程度を代表するものとも云はれまい。別して我政府の參同時期の後くれたと、美術家一般が世界的名聲の獲得に甚だ冷淡なるが爲めに、我出品物は、恐らく、現時の實際的標準から觀ては、比較的劣等なるものであらう。

此點に於ては、桑博の不評判は、多少、慰むべく、安んずべき餘地はある。

■桑博の不評判が我が現在美術の最高程度に關係なきものとして、扱て我美術の現状を知悉するものが、世界美術の立場より觀察して、樂觀し得るかどうかと云へば、決して、樂觀し得るものとは云へぬと思ふ。美術中の重なる日本畫なるものには、これと云ふ纏つた見處が無い。列國の美術界に突き出して、此特點を見て呉れと自慢する特色が無い。若し、特色らしきものがあつても、それらの特色は、過去の日本畫が、より好く、より多く備へ居るものであつて、現在のものは、其幽かなる陰影に過ぎない。而かも此陰影の外に、新たに附加せられた新時代の特産物と

觀るべき優所は無いのである。日本畫の翫賞が世界翫賞者の立場から、常に過去の日本畫に限られ現在の日本畫なるものは、毫しも其内に含まれ居らぬ事は無理ならぬ事と思ふ。

■現時の日本畫が、世界一般の人間に重んぜられぬ原因の一つは、技巧から見ても、又作者の感興から見ても、兎角、上つ面の裝飾に限られ、深く、自然の内核を握つて居らぬは云ふまでもなく、自然の接觸さへ満足に保ち居らぬ事である。作者の感興は、多くの場合に於て、過去の作者の感興の受買りであり、技巧は、過去の作者の技巧の折衷に過ぎない。孰れにしてもセカンドハンドであつて、凡ての藝術の泉源たる自然との交渉は極めて稀薄である。斯の如き性質の製作は、其性質上人間の情緒を震動し得

るものでない限り、等閑し去らるゝは當然なる事であつて、此方面から觀ては、日本畫なるものが極めて不健全な状態にある事は争はれぬ。

■斯の如き状態の自づから起し來る一つの弱點は、自然なるものに對して作者の要求が淺薄であると同時に、幼稚なる事であつて、現時代の要求する深刻な感じは今の日本畫家に依つて満足されて居らぬ。それに、人事的感興の力が極めて薄弱である。人間と云ふものゝ非常に深刻な觀察に慣れて居り、又其觀察の實現を以て、凡ての藝術の最も高さものと考ふる歐米人にとつては、我が作家の人事的觀察の如きは、餘りに淡泊であり、又平坦であり。世界の觀者は作者に熱情を要求する。自然の眞に基

いた熱烈な解釋を要求する。今の日本畫は血に乏しい、人と氣が少ない。人間の觀察に於て、ジュウラー。レムブランド。ホルバイン。ホガースを要求し、風景に於いてはホツペマ。ルーソー。コンスタブル。モネーを起さずにをけぬ歐洲人は、運筆の曲藝や無意味な暗示に満足出來ぬ。日本の繪畫が、今の世界的舞臺に立つには、大に平民となり下らねばならぬ、大々的に娑婆氣を殖やさねばならぬ。時代と融和せぬ所以は、未だに極端なる貴族的撰擇の思想が勢力を占めつゝあるが爲である。

■ある獨逸の批評家が日本畫を目して、風を喰ふて生存し、足無くして歩むを覺えたる藝術」と批評したと云ふも、又ある評家が「今や日本美術に對する反動起りつゝあるが如し。西洋、東洋は

二箇の異りたる國土にして、各自の藝術は互に深く信頼すべきものならざることの、西洋全體を通じて、一般人士の間に認識せられ始めたる徴候を認む」と公言するも、要するに、傳統的、形式、技巧を本位として、自然を參酌する、我が作家の態度と、自然に就て感得したるあるものを主として、それを表現するに最も適したる自由なる技巧に據る外國作家の態度との相違から起り來つた思想上の現象であつて、此互に逆倒する態度の存する間は、假りに、事の是非、善惡は別として、世界の繪畫と所謂日本畫なるものとの間に通じ難き溝渠の横はる譯であり、従つて、世界の美術舞臺に於ては、仲間外れの扱を受くべき道理である。

■自然より感受したる個人の感想を實現せんとする努力から

生ずる繪畫なるものに、東西斯くの如き變りあるべき筈は無い。日本畫が世界繪畫の普通の軌道を外づれたに就ては、其處に、有力なる特別の原因がなからねばならぬ。自分は此原因の最も大なるものを、日本畫の用途、即ち日本畫の最も多く用ゐらるゝ室内裝飾から來つた建築の壓迫と思ふ。凡そ懸物、額面、屏風、繪襖に造られたる我が繪畫と、我が住家建築ほど、其材料に於て、其手法に於て、又、其氣分に於て能く調和するものは無い。日本建築、日本繪畫の完全なる調和に於ては、伊太利亞の寺堂と鮮畫や、ゴシック寺院と硝子畫の調和などの遙かに及ぶ處で無い。繪畫の用材は、其の質に於ても、其重量に於ても、我住家室内の用材の外質、分量、重量と、極めて微妙なる均衡を保つて、兩者の間に、寸

分の衝突も發見し得ぬ。

■併し此驚嘆すべき調和は、繪畫の側に於て、其本領の非常なる讓歩に依て成立して居る譯であつて、此讓歩は、室内裝飾としての美術として、美事なる遜讓に相違ないが、自然より受けたる印象の正直なる告白としての繪畫の根本義から觀ては致命的讓歩である、自殺である。此犠牲の内には、題材撰擇の自由も、技巧進化の希望も、自然との親接も、科學的知識の吸收も、時代との接觸も、平民的生命も、——凡そ繪畫の本體を形成する滋養は悉く含まれて居る。此本體の健全を、建築の爲に奪ひ去られた今の日本畫が、「先づ繪畫なれ、而して後に美術なれ」を理想とする外國の作家から風を喰ふて生存し、足無くして歩むを覺えたる藝

術と冷やかさるゝも亦餘儀ない次第である。

■室内裝飾に服従する繪畫の拂ふべき犠牲の中、最も大なるものは、繪畫の材料である。建築の要求する最大條件は、先づ繪畫に用ゐらるゝ材料の具備する視的重量であつて、此自由は、如何なる迫害を加ふるも、繪畫より奪はねばならぬ。然るに繪畫の側に於ては、材料の自由は其生命である。材料の限らるゝと同時に、技巧の自由は奪はれ、技巧の自由の奪はるゝと共に、表情の自由は奪ひ去らるゝ。日本畫の材料を以つて、ミケランシエロの理想は易く現はされる。アルブレヒト・デュラー。ハンス・ホルバインの理想も現實されよう。併し、レムブラントの夢想や、ルーベンスの慾望は現はし難い。材料の制限は、結局、作者が

感想區域の制限であつて、繪畫の健全なる又自然なる轉化に就て、此制限ほど無慘なるものはあるまい。

■裝飾としての要求の恐怖すべき結果の一つは、畫家として、精神的、感興的、自由の束縛である。凡そ社會の人、相互の交接は、自我を抑制し、互に讓歩し、常に第三者として、一種の無色の地帯に存在するが如き氣分の維持に依つて、圓滑に進行するのである。常に外客に接する室内に懸けらるゝ裝飾的繪畫は、正當なる意味に於て、主客と鼎座する一種の人格である。主客ともに中立地帯に彷徨して床の間の繪畫獨り、主我的氣分を發揮する譯には行かぬ。之れ亦第三者として無色の地帯に止まらねばならぬ。此讓歩は、作者の側に於ては、有力なる裝飾畫家の先づ第一

に心得べき精神状態であつて、古今東西、裝飾畫家としての名人は名高い勲間と同じく、何れも此考を失は無い。其結果は、花卉山水の題材を選んで、可成、人事に遠ざかる事である。感想に於て、個人に偏せず、極めて普遍的なる、曖昧なる態度を維持する事である。要するに、優れたる裝飾畫の與かるべき感想はナンセンスであつて、十八世紀の佛蘭西畫を觀ても、或は近頃歐米諸國の公共建築に用ゐらるゝものを觀ても、裝飾畫の中にはセンスがない。無くてこそ裝飾畫である。此意味に於て、和蘭土派の繪畫程、裝飾として役に立たぬもの無く、又ナンセンスを嫌ふ英國人は、兎角、單純なる裝飾畫に頓着せぬ。

■斯の如く、常に、裝飾理想に壓迫さるゝ作者が、自づから個性の

反撥力を害ない、自然に對する自我的觀察力を失ひ、時代の活社會に離れ、僅かに許されたる技巧の末技にのみ齷齪するに至るは、避くべからざる順序であつて、今の日本畫家は申し分無く此順序を踏み來つた者と思ふ。

■繪畫が其全身を建築に捧げた美事なる實例としては、日本畫ほど其覺悟の立派なものはない。従つて、日本の住家建築の背景を離れた日本畫ほど無意味なものも無い。外國美術館に陳列さるゝ日本畫を見る毎に、日本畫の干物を見るが如き感じを禁じ得無い。我が作家が、住宅裝飾としての繪畫を理想とする間は、何處迄も、古來の傳統を續けねばならん、之れ以上に調和しこれ以上に進むべき道は夢想し難いからである。併し、汎く自

然並に、人事界の感想を表現するてう繪畫本來の目的を遂行せんとする作家は、先づ、此建築的壓迫から離脱し、感興に於ても、用途に於ても、材料に於ても、技巧に於ても、自由、氣儘なる天地に活動せねばならぬ。

■斯くして現はるゝ繪畫こそ、世界の繪畫である、我國の繪畫は斯の如き状態に至つて、初て世界に覇權を争ひ得るのである。我が特殊なる住家に從屬する特殊なる繪畫が、世界の舞臺の關する問題で無い事は明らかである。

美術と金

■美術と金と云ふ題目の下に、近頃の歐米美術界の種々雑多な現象と其金銭との關係を列擧して見たいと思ふ。何と云ふても、金^〇が最後の問題である。社會に於ける美術の實際の勢力を知るには、學說の状態でも無く、組織の完全でもなく、人間の最も大切に扱ふ金銭が、如何ばかり、又如何にして、此方面に消費せらるゝかを知る事である。先づ、

古畫の價格　と云ふ問題から始めよう。歐米で、過去三十年の間に古美術品の騰貴したことは非常なものである。其實例

は枚擧に遑ないが、一寸、一例をあげると、英吉利で、ツレイルと云ふ人が、明治二十年に、約一千圓で買った、レイバーンの描いた二枚の肖像が、今から四年前、即ち三十年経たぬ間に、十六萬六千二百二十六圓と云ふ價格で賣れた。巴里のある有名な仕立屋の主人が、今から三十年前に、三百萬フランで買つて置いた十八世紀時代の佛蘭西美術品が、一昨年(大正二年)、二千四百萬フランと云ふ値段で買はれた。其外か、古畫の上り方を示す實例は頻々と起りつゝある。大正一年の競賣で最も駭かしたのは、六月頃に競賣に附せられた、カンタン、ラツールの描たバステル畫の直段で二十六萬四千圓と云ふ價格であつた。買手はロスタチャイルド男爵。先づ近年の古美術賣買界での破天荒の取引と云れて

居る。殊に、バステル畫で此價格を出したと云ふことが注意を惹く一原因である。バステル畫で、此カンタンの作以前に取引された、最高の價格がジオン、ラッセルの描いたエリザベス、カリ夫人のバステル肖像で、初め、英吉利で、一萬六千二百七十五圓で落札したのが、數年の後、巴里で、一躍、三萬二千圓と云ふ異常な直段を出した。此邊がバステル畫の頂上と思ふて居ると、此カンタンの作のように、幾十萬と云ふ處迄昇る譯であるから、古畫の直段と云ふものは、實際、人間普通の賣買心理では判断が出来ない。バステル以外の作で、今迄の競賣歴史上、最高價格は、英吉利では、レイベーンの作、ロバートソン、ウイリアムソン夫人の肖像で、二十三萬四千一百五十圓と云ふ價格である。レイベーン

ばかりでは無い、一體に、十八世紀畫家の作は近頃の市場では非常な高價を出したようである。英吉利では、此夫人の像が、最高價格であるが、佛蘭西での一番が、ルーヴル美術館にある、誰も能く知つて居る、かのムリーヨの聖母像であつて、其買價二十五萬圓、高いようでもカンタンの價格から見ると一萬圓から安い。圖柄を問はず、作の性質を云はず、唯だ古畫の競賣上、最高の價格から云ふと、恐らく、ヤンクス競賣の時、米國人の買入れた、フランス、ハルスの「老婦人」の像であらう。此畫の價が、驚くなかれ、二十七萬四千圓であつた。併し、大正二年、十二月二十四日の電報で、チシアンのフィリップ二世の像が八十萬圓でシンシナタ市の一未亡人に買はれたとの通知があつた。若し此價格が本當

であると、古畫價格のレコード破りと云はねばならん。古美術品の價は益々高まるに違いない。併し古作品の價格の高下は、直接、新作品の價格に關係することであるから、美術家の生存問題研究上、中々、香氣に見遁すことは出来ない。同時に、此ような價格を生ずるに至つた製作の作者を思ふと、著作権の保護とか、作者遺族の救助と云ふような問題の起るのも、尤もなことである。殊に、作者の生存中に、異常な價格を生ずる場合に於て、此感は、愈々深くなる。例へば、ミレの「アンジェラス」の暴騰などは、此著作権保護法の、人道上、最も必要なことを、思はせる。此畫は、初は、誰人も買手無く、中頃一萬二千圓の價を出し、次に六萬四千圓となり、八萬圓と上り、十二萬圓と昇進し、遂に三十二萬圓でシオ

ーシャルル氏の手に入つた。併し、幾百萬に昇つても、肝心の作者には、何等の響も無い。作者も、遺族も顧られない。随分、不公平な話である。

■近頃の古畫賣買界の取引價格で、古作品の相場を見ると、矢張、歴史的大家の製作は非常なる高價を現はして居る事が解かる。ヴァン、ダイクの「婦人と小兒の像」は、去年の五月、英國、ナシオナル、ガレリーから、十萬圓に購ひ取られた。同じブランドル派の、ずつと古るい處でも、中々の價格である。即ち、一昨年(大正二年)の十一月、所有者ウエストミニスター侯爵家の相續者、テオドラ、ガラザナー夫人から佛國政府へ賣渡したロヂエー、ヴァン、デル、ウエイデンの三幅對の價が約四十萬圓であつた。ホルバインな

ども、中々の高直であつて、去年(大正三年)の六月に、クラレンドン卿が古畫商アグニユーに賣却した同畫家の「クロムウエルの像」は三十萬圓であつた。レムブランドに至ては、不相變の相場で、所謂寸片斷紙でさへも中々近寄れない事實は、去年の十一月、アムステルダムで催ふしたヘセルチス公賣で、ルーヴル美術館の代表者が手に入れた裸體婦人像の素畫が、三萬七千五百フランしたと云ふのでも解からう。今の歐米古畫翫賞界では、一體に、和蘭土、ランドル派の作がもてゝ居る。一昨年の取引中、一萬圓以上のものは、重もに、此二派のもので、小畫では、ビートル、ダ、ホーフのものが、一番に、需められたと云ふ。

■古伊太利亞の製作も、古畫界では、偉らい勢力のものであつて、

今時代の畫家の眼から觀ては、確かに、別世界の感がされる。ラファエルなど云ふと、今の畫家の間には、もう振り向く者も無いかのようであるが、古畫賣買界では、依然として、威力を振つて居る。一昨年の秋頃、デスポロー夫人が、畫商、デュヅキーンを譲り渡した「パンシアンジャー聖母」の價が七十萬圓であつて、而かも、此畫が、間も無く、其倍額一百四十萬圓で、費府の畫商ワイドナーへ賣り渡されたと評判されて居る。チシアンの作は、いつも、尊重されて居る。併し、同じ、一昨年中、サー、ヒユウ、レイン氏の購ひ入れた「赤帽の男」が十三萬六千五百圓であつたと云ふと、ラハアエルと比べては大分の差があるように見える。ダ、ザキンチも相當に重んぜられて居る。昨年(大正三年)二月、露國皇帝が、約一

百年前からサボデニコフ家の寶物である處の『花の聖母』を、十五萬圓で購ひ入れられたと云ふ報道が事實であると、チシアンに劣らぬ地位を保持して居ると見て好いてあらう。伊太利亞派の古畫は、是等の大家の作ばかりでは無い、第二流とも思はれる作家のものでも、相當な價格を保つて居る事實は昨年、十二月の報道に現はれたカルチエー家所有のチエボロの作四點が、畫商セーデルマイヤーに、十三萬リレで賣却されたと云ふ一例でも解かると思ふ。序に、茲に書き入れるが、此チエボロの畫に就て、面白い話がある。此畫の所有者カルチエー家と云ふのは伊國ジェノア市の名家であるが、同家は、今から四年前に、上の價格で畫商に賣り拂らい、其畫は伊國の現行、古畫國外移送法を潜つて、

密かに外國へ送られたが、當時、ミラノの美術館長は伊國政府を代表して、カルチエー家と交渉し、一千九百八年に、二萬リレ、其後、順次、三萬、十萬、を提供し、とうとう仕舞に、十五萬リレで購入を申込むのだが、相談が纏らない。處で、政府は、國法違反との廉で、カルチエー家を告訴し、犯罪の罰金として、六萬リレ、税金忌避罪として、二萬リレ、名畫を失ふ國家の損害要償として、十五萬リレ、總計、二十一萬二萬リレの金を差出すよう命じたと云ふ。

■以上に擧げた、大分、古ふい處の大家から觀ると、近頃、偉らい評判を揚げた大家でも、價格に於ては大いしたものは無い。グレコと云へは、畫家の間では、非常なものであるが、去年の五月、ヘンリー、フリック氏の購入した此作家の『鎧を着た男の肖像』が三

十萬圓で、而かも、此作家のものとしては、それが最高價格のものであると云ふ處を以て觀ると、ラファエル。チシアンと比べては大分の懸隔がある。これと比べると、モルガン蒐集から、同じ富豪が購入したフラゴナールの作(數點未詳)の二百八十五萬圓は、大變なものである。美術家間の評判と、翫賞家の評判には、中々の相違があると云はねばならん。

新畫の價格 過去、約百五十年の間に出來た畫を新畫と見做して、其相場を見ると、此方面でも同じく暴騰である。無論、其金高は古畫とは、比較にならないが、併し價格の迅速に昇つた事は、ある獨逸人が、明治三十九年に、一千六百マークで買つたフオーゲル教授の作を、其後、一千九百マークに賣却したが、約四年前、五

千七百マークと云ふ價格で落札した、即ち、六年ばかりの間に三倍以上の價格に昇つたと云ふ、一例を見ても解かるであらう。

■新畫と云へば、其最も人望あるものは、恐らく、佛蘭西の風景畫であらう。殊に、バルビゾン派の製作は、今の室内裝飾としては、手頃であり、又、現時の翫賞家の氣分にもよく適合して居る處から、需用が多い事と思ふ。一昨年(一九一三)十二月、巴里のヂウルビーイ競賣の結果を見ると、ドービニーの「オワーズ河邊の夕景」が一萬二百二十圓、ドカンの作「ロトの逃走」と云ふバステル畫が五千八百圓、イサペーの「ラムールの驚愕」が一萬、五百六十圓と云ふ取引であつた。ずつと降つて、印象派連や、ある現代作家の製作の相場を知るには、故林忠正氏の紐育競賣などが參考になら

う。其結果を見ると、ドガの筆『浴女』と云ふバステル畫が、六千二百圓、同じ作者の『眠れる女』同じく、バステル畫が、四千二百五十圓、ルノワールの『裸體』が三千三百三十圓、ピッサロの『浴女』が八千四百圓、マリー、カサットの『女の頭首』、バステル、が、二千一百圓、モネの『磔地』が五千六百圓同じく『花裏の小兒』が六千圓、シスレーの『川添い』が四千二百圓、コランの『濱邊の舞踏』が六千圓である。尙、ずつと近くなつて、現大家の作品價格を見ると、サージエントの最上の製作、例へば、去年、ノードラーの畫會に出品された『ムーアの中庭』が八千圓で購買せられ、素畫の肖像でも、六千五百圓と云ふ直段である。露西亞の有名な畫家レビンの作が、昨年、四月、二萬圓で買ひ取られ、英國の大家、ラヴェリーの肖像畫が、四千圓、オー

ペンが、四千圓、オーガスタス、ジオンののが二千一百圓と云ふ價格である。昨年、英國擔荷協會の爲に開催した展覽會の賣價を見ると、サージエントの『ポブラーの下』が二千六百圓、同人の『カレル、デー』が二千圓、カメロンの『ポブラック』が五百五十圓、同じ人の『ポーラム』が三百圓、ブリックデールの『飛行機』が二百圓、ヘミールの『蠟採り』が四百圓となつて居る。所謂、後期印象派などは、どれ程の價格のあるものか、マチッスの彫刻が、米國モントロッス畫堂で、六百五十圓に引き取られたと云ふ報道を見た事がある。

骨董品 我國で、一口に骨董と呼んで居る古器物の、外國でも珍重され居る事は、我國と變はらん、寧ろ、其愛翫の程度は、彼地の方が深いようであり、又、富有な國だけに、莫大な金を拂ふ。それ

に、同一種類の品物の蒐集に凝り固まる人間が多い爲に、時によると、価格が非常な程度に上る事がある。例へば、昨年のモルガン蒐集賣却の時などでも、伊太利亞マジオリカの蒐集だけが、四百萬圓の価格あるものと評判せられ、其瑞西時計の歴史的蒐集が、一百萬圓と評價された。昨年二月、クリスチーのブランドレス壁絨競賣では、ルフエーダルの三幅對のゴブラン壁絨が、七萬五千圓でクロロー氏の手に濠ち、アルチュール、サンボン氏の蒐集品賣却の時などは、九十七萬五千九百七十四フランと云ふ巨大な価格に上つた。これを見ても、古器物に對する、一般愛翫者の熱と云ふものが、どんなものかは解かるであらう。サンボン蒐集中の目星しい品物を観ると、ある種類の古作品の時價か知

られる。即ち、第三世紀時代の埃及彫刻「若き男と女」が二萬二千五百法。ヘレニヌチック時代の小彫刻像が、二萬五百法、手寫の古詩書が六萬五千五百法、衛時代の支那佛像が五千五百法、陶製觀音の像が九千六百法、狩野永徳の六枚折屏風が約千圓で落札して居る。競賣の賣上高の巨大な例としては、一昨年、巴里で行はれたエイナール競賣などが好いものであらう。即ち、二回の競賣で四十三萬二千圓と云ふ巨額に上つて居る。點數の比較的尠ないにも拘はらず、価格の巨大なのは、裝身具の競賣で、一昨年、十二月に巴里で行はれたレイアー、デュブレイ氏の裝身具競賣では、一百二十三箇の眞珠を三列に列らべた髪み飾りが三十二萬一千四百圓で、ポラック氏の手に落ちた。上に舉げた、

サンボン氏の蒐集品中に、支那古陶器の賣價を擧げたが、支那の古器物は、近來、非常に愛翫され出して、從て、非常な高價を現はし始めた。其最も顯著な例は、數年前、ブリチッシュユ、ミュージアムで購入入れた、唐時代の作と云ふ僧侶の大坐佛で、約十六萬圓で購入入れたものと言れて居る。北米費府の大學美術館でも之と同様のものを購入れたが其價格は解らない。恐らく、巨額を拂ふたものであらう。殊に、支那の古器物では、陶磁器類が最も愛翫せられて居る事は、ヘンリー、サムソン氏の蒐集が一千萬圓と評價せられて居るのでも解からう。

■古器物の愛翫では、物品それ自身の美術的價值からでなく、其歴史的關係から、記念物として、愛翫されるものがある。これが

又、競賣界では、相當な勢力を有て居る。此方面で、最も顯著なのは、ナポレオンに關する蒐集であらう。此蒐集ではラツタ、コレクシオンと云ふのが世界第一のものと認められて居るのであるが、此の蒐集が、先頃、六回に亘つて競賣に附せられた。其結果を見ると、前四回の分だけで、六萬一千七百七十圓と云ふ賣り上を現はして居る。恐らく全部で、約十萬圓の額に上つたであらう。文豪ゲーテの遺物競賣も昨年、伯林で行はれたが、茲では、七寸に八寸大の肖像が一千三百圓、文豪の別荘の圖を描いた古ゴータ製の陶皿が七十圓と云ふ高價で落札した。

遺産寄贈 西洋での美風の一つは、財産の一部を公共團體に寄贈する事であるが、此美風の爲に、最も大なる恩惠を蒙むるも

のが美術である。美術學校、美術館は、此美風なしには、逆も存在し得無い。謂ふ迄も無く、此美風の最も盛んに行はれるのは、米國であるが、併し、米國のみに止らず、西洋では、何れの國でも、相當に行はれて居るのであつて、年々、此方面に捧げらるゝ金高と云ふものは、巨大な金額に上るであらう。最近の例を舉げて、非常な額である。昨年二月七日に逝去したエミール・ボンデー氏は、所有の美術品に、二萬圓を添えて、メトロポリタン美術館へ寄贈した。巴里で死去したマリイ・シルヅキ、グランヂエー夫人は、遺産の中、九萬四千圓を、同じ美術館へ贈つた。アレキザンダー・マツケー氏は、遺産の内、廿萬圓を、ミンシンジャー蒐集の維持、擴大の資金として、シカゴ美術館へ寄贈した、これが今年一月

の事である。同月下旬に、オルトマン氏の遺言により、二十萬圓が、紐育市の美術學院へ、時價約二千萬圓と評さるゝ同氏の蒐集が、メトロポリタン美術館へ贈られた。ライシנגル教授の逝去の爲、同氏の遺産の内、コロンビア大學の美術歴史講座創設の基金として、二十萬圓、ハーヴァード大學、獨逸美術館建設費として、十萬圓、獨逸の繪畫、彫刻品買入れの條件で、メトロポリタン美術館へ、十萬圓、柏林市の帝國美術館とミュンヘン市の新美術館へ、各々十萬圓、氏の郷里ウイースバーデン市へ建設する記念噴水建設費として、五萬圓、ミュンヘン市の獨逸美術館建築資金の内へ、二萬圓、寄贈せられた。以上は、北米での出來事であるが、巴里でも、去年十一月、シュリヒタイン男は、價格四千萬圓と云はる

る其蒐集全部をルーザルに寄贈し、先頃死去したコッペンハーゲン市のカール、ヤコブセン博士は、其遺産の殆ど全部、八千萬圓を美術奨励資金に提供すべく遺言し、瑞典の外務大臣は桑港大博の同國出品に際し、資金を補助する爲、五萬クローネを私財から寄附した。

救助團體 諸種の救助團體の消費する金額も尠なからぬものである。先づ此種の計畫として第一に擧ぐべきものが、**美術學院**の保管に係かる救助基金であつてこれは、目下の處、五箇ある、即ちニュートン基金、ターナー基金、クック基金、カズンス基金、エドワーズ基金で、第一のニュートン基金は、全額十五萬圓、其利子を以て、年々、貧困なる畫家の寡婦一人に支給するのであ

る。第二のターナー基金は、ロイヤル、アカデミー會員以外の名聲ある美術家で、一人五百圓づゝ、年々、十六人に與ふるもの、第三のクック基金は、同じく、美術學院會員でない六十歳以上の者二人を限つて年々、救助するもの、各々、三百五十圓、第四のカズンス基金は、アカデミー會員以外の畫家七人に與ふるもので、一年、八百圓宛、第五のエドワーズ基金は、同じく、會員でない、貧困な美術家、製版家を救助する目的で、一人、一年、四百圓を與ふるものである。次に擧ぐべき、麗はしい團體が、英國の「一般美術家救助協會」(アーチスト、ジェネラル、ベネヴォレント、インスチテューション)であつて、其の目的は貧困なる畫家、彫刻家、建築家、製版家、並に、彼等の寡婦、孤兒を救助するのである。寄附者は一人、一年、約十圓、

五十圓の寄附者は、一年、二人以上の被救者を推薦する権利がある。基金総額は、現今、約九十一萬圓で、大正二年度には、一人、五十圓から、千圓の金額を、一百九十七人の間に分配した。此團體の外かに、英國の美術界には、六箇の救護並に相互救濟團體がある。即ち(一)美術家孤兒基金(アーチスト、オルファン、ファン)は、美術家孤兒の教育、生活を目的とするもので、現在基金約七十七萬五千圓、大正三年度中に、約二萬圓が、七十八人の孤兒に與えられた。(二)美術家基金(アーチスト、ファン)は、約一百十年以前の創立に係るもので、其目的を、美術家養老救助と、美術家慈善救助の二項に分ち、各種の美術を職業とする者を救助するのである。現在基金額は十七萬圓である。(三)美術家年給基金(アーチスト、アヌ

イチ、ファン)は全部、會員組織で、會員は病氣、或は事故の場合、一人、一週、十五圓の支給を受くる権利がある。九ヶ月以上病氣の續く場合には、病歿或は平癒の時迄、年々、四百圓宛の支給を受ける。別に養老、病身補給法もあつて、失職者、老衰者は、死歿の時迄、一年、四百圓を受け、又、死亡の場合、其遺族に、一時金、四百圓を與へると云ふ仕組である。此會は、一口に云へば美術家の相互保儉協會である。(四)美術家救助基金(アーチスト、ベネヴォレント、ファン)此會は、前に擧げた年給基金の會員のみの寡婦、孤兒を救助するのが目的であつて、一般の人々からの年會費で成立して居る。現在基金、約三十六萬圓で、一年、約一萬二千圓を給與しつつある。(五)蘇格蘭土美術家慈善協會(スコッチ、アーチスト、ベ

ネグオレント、アツソシエーション)は、一千八百八十九年の創立で、其目的は、既に挙げた一般美術家救助協會のそれと同じである。(六)美術商保倫協會(デラリス、イン、フアイン、アーツ、プロダキデント、イン、スチチュエーション)の目的は、美術商業に従事する會員并に其寡婦、孤兒の救済であつて、現在、會員約一百五十名、基金は約九萬圓である。巴里にも、此種の古るい會がある。即ち現今、デエルマン、ボーイ氏が其會頭として組織して居る會で、此會は、過去七十年の間に、貧困美術家、并に美術家の寡婦、孤兒救済の爲に、約二百四十萬圓を支給したと云ふ。

■以上は美術家が社會一般からの同情を受くる側の慈善であるが、此大戦以來、美術家側から寄贈した金額も尠くない。紐育

市、ウイトニー夫人の畫室で催ふした恤兵展覽會は約二萬圓の賣り上を出し、インターナショナル、スチユデオ雜誌の主筆ネルソン氏首唱して催ふした展覽會は六千六百圓の純益金を白耳義國々王に送り、ロンドン、クリスチー畫堂で催ふしたロイヤル水彩畫會は二萬圓の賣り上げを得て、英國赤十字社へ寄贈し、ロイヤル、アカデミー會員はデキシー畫堂で六百點の作畫を展觀して、全收入三萬圓を美術家慈善團へ寄附した。

公共團體 美術館保護協會など云ふものも、年々、多額の資金を吸収しつつある。近頃の報道に據ると、米國、オハイオ州、オベリン市の新美術館建設費が二十五萬圓、同國、ミニアポリス市の美術館新築費が一百萬圓、今年、其の北翼をフレデリック、レイト

ン氏の寄附金二十萬圓で始むる筈である。獨逸のドレスデン市では、二十二萬五千圓の市債を起して、近世畫展覽會場を新築する企を始めたさうである。美術館の建築にも大變な資金を出す。其陳列品の増大、維持にも中々の金を消費して居る。佛國々立美術館年報に據ると、一昨年(一九一二)度の美術購入費は六十五萬四千七百圓で、豫算金額から、三萬七百五十圓を剩ました。然るに、紐育市のメトロポリタン美術館では、一年、僅に十萬圓の豫算で迎も其様な事ではをつゝかない。一昨年の同館豫算超過額は三十二萬四千三百六十六圓、一昨々年の超過額が十四萬三千五百圓であつた。此超過額は全部、役員で負擔し自腹を切つて拂つて仕舞ふとは、道に金の喰ふ北米である。

(終)

出版者より

『趣味叢書』の第二期も愈々これにて終りとなりました。今回は豫定より大分遅れましたが、種々止を得ざる事情もあつたので、會員諸君及び讀者諸君には、唯御詫びをするより外ありません。

『趣味叢書』は將來猶繼續したいと思つて居ますが、とにかく十二冊で一と先づ完結とし、後は別な形式で出版するつもりで居ます。尤も今後は趣味之友社の方でやるつもりです。

『趣味之友』は御蔭で多くの同情を得て、新年創刊號の編輯を終り、恐らく本書の發刊以前に出来るだらうと思ひます。趣味叢書の會員諸君は既に續々購讀を申込んで居られますが、猶どし／＼御申込を願ひます。(十二月十日、露月町にて、鴨心生)

趣味叢書書目

定一自第一冊至第五冊各全壹圓
價一第六冊以下各全壹圓貳拾錢
郵送料市内全四錢内地全八錢

東京市外青山北町七丁目二番地
趣味叢書發行所
電話東京二六七〇六

發行所

不許複製
著者 岩村透
發行所 東京市神田區美土代町三丁目二番地
印刷者 島連太郎
印刷所 東京市神田區美土代町三丁目一番地
東京市本郷區籠園町廿七番地
東京市外青山北町七丁目二番地
東京市神田區美土代町三丁目二番地
東京市神田區美土代町三丁目一番地
振替東京二六七〇六
電話芝一七七五

大正四年三月十六日印刷
大正四年三月廿三日發行【定價金壹圓貳拾錢】

趣味叢書
第十二篇『美術と社會』

大正四年三月十六日印刷
大正四年三月廿三日發行【定價金壹圓貳拾錢】

趣味叢書『美術と社會』
第十二篇

不許複製	著者	東京市本郷區藏國町廿七番地 岩村透
發行所	東京市山北町七丁目二番地 黒田朋信	
印刷者	東京市神田區美土代町二丁目一番地 島連太郎	
印刷所	東京市神田區美土代町二丁目一番地 三秀舎	
發行所	東京市山北町七丁目二番地 振替東京二六七〇六 趣味叢書發行所	
東京市芝罘區 月町三	趣味之友社	電話一七七五

趣味叢書書目

東京市外青山北町七丁目二番地

趣味叢書發行所

振替東京二六七〇六

定 自第一篇至第五篇各金壹圓
價 第六篇以下各金壹圓貳拾錢
郵送料市内金四錢内地金八錢

工學博士 伊東忠太先生序

第壹篇 都市の美觀と建築

四六版本文二百四十二頁
前附十六頁索引八頁
建築寫眞三十七圖

【世評一般】 時事新報 世に建築學及び建築設計書の類ありと雖も、未だ本書の如く實際に既設建築の品評をなし、以て建築趣味の普及を計りし者なし。本書を讀くに觀察頗る犀利にして所説概ね穩健
■東京日日新聞 黒田文學士は現今に於ける建築批評家として唯一の人なり……著者が一般公衆を相手として其趣味知識を開發するの用意を以て執筆せるは大に喜ぶべし
■萬朝報 著者がこの書によつて生きたる建築に對する生きたる批評を試み、且つ建築批評の原則をも明かにしたるは萬人の以て律梁とすると共に、建築批評の第一書として歡迎する所なるべし
■山陽新報 輕浮なる今の出版界に於て確かに出色の著書たるを失はず……此著確かに新しき試たるを失はず、從つて著者が之に先鞭を着けたる功は決して没すべからず候(浮草生)
■國民新聞 穩健の論周匝の説、高遠の理に走らず、能く通俗者流をも啓發するに足る親切は特筆すべきである。尙卷末には便利なる索引を附してある
■生活 著者黒田君は所謂建築三昧に入れる者代表的の大建築を横から見縦から察し、建築に對する常識の發達と趣味の普及とを力説してゐる、近來出色の出版物である
■國やまと新聞 現代に於いて著者以外に何人も企て及ばざるもの、敢て文藝愛好家は勿論一般江湖の結賢に薦む。

自第一篇 至第六篇 黒田鵬心著

男爵 岩村 透先生序

第貳篇 趣味 雑話

四六版本文三百二十八頁
前附十五頁 寫眞版四葉
著者小照コロタイプ入

【世評一般】 東京日日新聞 美術批評家として一雙眼を備へたる黒田文學士の趣味叢書第二篇也。趣味に關する美學上の説明もあれど、藝術界の時事問題を捕捉して論評せるもの多し。著者の批評は見識の優れたるものあると共に、著しく教育的價値に富み、絶えず社會公衆の指導を忘れざる態度は、最も多とすべし、社會の趣味教育上本書は大に推奨すべきもの也
■時事新報 主として趣味を中心としたる評論感想等を蒐めたり、著者が著者だけに美術に關しては殊に傾聴すべき所少からず
■美術新報 「趣味と流行」の如き卑近な問題から、鑑賞論の如き深遠なる學理まで、或は「日本畫の將來」を論じ、年々の文展を評し、「看板美學」を觀察する等、其の他著者の眼光の映ずる所、事物として趣味の問題ならざるはなきの概がある
■萬朝報 方今批評家多しと雖も、國民の趣味啓發を任として藝術及び日本藝術の根本義に觸るゝ問題を解説的に行り、もしくは時流に先んじて藝術推移の進路を占ばんとするが如きは著者の獨壇場なり、吾人が時に氏の作物批評を慊らずとしながらも、猶ユニークなる地位を批評界に占むるものとして、推服措く能はざるはそれが爲め也。此書載する所卅餘篇、如上の見地より見て何れとして價値の存せざるなく、さながら趣味の溢るゝを覺ゆ
■東京朝日新聞 美學的の立脚地に立ち専ら現今の實際問題に關して批評判断したるところ、頗る新界を啓發するに足るものあり。

文學博士 黑板勝美先生序

■ 第參篇 日本美術史講話 上

四六版二百七十頁
寫眞版五十二圖
木版十五圖挿入

【世評一般】 萬朝報 普通の美術史は繪畫を主とすれど此書は建築を主として、各章の題目も天平期といふ代りに「東大寺と唐招提寺」弘仁期といふ代りに「平安城と延暦寺」とせり、上巻は國初より藤原末期に至り、彫刻、繪畫、工藝美術また大體に要を盡し、多くの寫眞版を巧に配置して、親しみ深く講述せり、日本美術を最も廣く見渡して、各時代の特色と代表作とを知り、流に従つて舟中景を賞するものか■時事新報 著者の態度は考證的に非ずして廣く國民の美的趣味を歸納し以て美的觀念の擷求に出たれば普通の史書の如く無味乾燥ならず■讀賣新聞 久しく簡易なる我が美術史の缺乏を遺憾としてゐた讀書界は本書によつて渴を醫する事となつた。日本美術一般にわたつて太古より藤原時代まで、満遍なく、通俗的に説かれたのは、他に類例を見ざる所であらう。■大阪毎日新聞 鶴心君は國民性に洞察もあり、了解も饒な人だけに、美術とその背後に横はつてゐる時代の生活といふ事について可成衝込んだ觀方もしてゐる。……忠實な、そして又器用な出來榮は、早くから美術史を要求してゐる吾が讀書界一部の渴望を醫する事が出來る■東京日日新聞 眞個の美術史としては本書は唯一の書たるべき名譽を荷へり■東京朝日新聞 一讀よく日本美術の推移特徴を知悉し、其の要領を領得すること本書の如きは未だ其の比を見ず■藝美 よく統一され簡明にわが美術の精華を窺はしめるに足り

工學博士 塚本靖先生序

■ 第四篇 建築雜話

四六版三二八頁
寫眞十八圖入

【世評一般】 函館毎日新聞 本書は明治四十二年より大正二年に亘りて執筆せる評論中より特に建築に關する部分のみを輯録したもので、要目には日本建築の將來と佛寺の再建、藤原建築の美、建築と美術、建築と人生、發賣禁止と建築、國民主義と建築、みどりと建築、徳川時代の五重塔、劇場建築論、書齋の話、夏の住宅、議院建築問題等、専門家以外にも必要の文字である。價值ある著述として書齋に推薦すべき良著である。■時事新報 所説何れも建築界の時事に觸れざるは無く高論卓説を接して現はれ讀者をして巻を措く能はざらしむ。■小樽新聞 著者は建築學に對する専門家以上の眼識と造詣と加ふるに興味ある觀察と筆致とを以つて、面白い題目を捉へて論じてゐる。■東京日日新聞 住宅の建築を論じ、庭園や書齋の趣味を説くあたりは清新の氣横溢して婦女子にも不知不識の間に斯學の知識を養はしむるに足る。「都市の美觀と建築」と相並んで建築趣味普及上に於いて双壁の書と云ふべし。■國民新聞 著者が過去數年間に草したる雜稿中より建築に關するものゝみを抜き來りて前後の關聯を考察して巧みに按排せるなり。之を讀下するに専門書の如く無味ならず、建築趣味の普及には却つて貢獻尠からざるべし。

工學博士 關野貞先生序

第五篇 古美術行脚

四六版三〇五頁
寫真四十六圖

【世評一般】 河北新報 寧樂京都嚴島平泉日光鎌倉近江伊勢其の他に散在せる古美術は悉く集めて此の一本に在り、以つて各時代藝術趣味變遷の跡を窺ひ知ると同時に自己の趣味を向上するに足らん。

■大阪朝日新聞 才人黒田氏の筆は如何にもなだらかに、建築を中心として其の四圍の情景を巧に描き出して居る。

■福岡日日新聞 由緒年代を稽へ、美的價値を論じて穩健に、津々たる詩趣に富む行文とは自ら其の地に遊んで古美術を見るが如き感を抱かしむ。

■新愛知 修學旅行を企てんとするものは是非一本を備ふべきである。

■時事新報 高邁なる鑒識と清新なる趣味とを以て此一卷を成す。日本の古社寺は爲めに新しき存在の意義を見出せるかの觀あり。

■中央新聞 著者の趣味深き學識が篇中に能く現はれたるを見る。

■國民新聞 之れを綴れば眼前其の境に在るの想あらしむ。

■東京日日新聞 本書一卷を篋底して旅行すれば其の興趣恐らく前日に百倍せん。

■萬朝報 體的旅行者にも心的旅行者にも便にして、索引を附せるは理想的也。

第六編 日本美術史講話

下 四六版三百三十頁
寫真版九十一圖
索引二種表一附

【世評一般】 讀賣新聞 上卷を承けて、圓覺寺と觀心寺とを以つて代表せる鎌倉時代から明治時代に至るまでの我が美術の精華を概説してゐる。例に依て暢達の記事を要を摘み華を抜いてゐる。人名遺物の索引、日本美術變遷一覽表を添えて用意周到、懇切丁寧、簡便に日本美術史を知るには、今までの處、これに越したものはないと云はればならぬ。

■東京日日新聞 各時代美術の發達特色等を述べこれに著者獨特の燃犀なる批評を加へたり。挿入の圖解、寫真等又周到なる選擇と用意との下に成り、殊に各時代建築の叙述は著者獨特の壇場たる觀あり。日本の有せる最初の首尾一貫せる日本美術史として本書は長へに其聲價を保有すべし。

■東京毎日新聞 上卷發行當時にも云へるが如く、よく平易明快に記述された所は此の下篇に至つて益々讀者をして利する處が多い。時代が複雑になつてよく其の緊切な所をひき出し、要領を得せしめた手際は感謝に値する。

■帝國文學 例によりて著者の專攻に屬する建築史は最も精細を極め、彫刻、繪畫其の他に關しても、要を摘み、精を抜き、廣きに亘りて一つも洩す所なし。

南 薫 造 氏 著
第七編 畫 室 に 関 して

四六版三一三頁
著者寫眞コロタイプ
網版十四葉凸版數個

【世評一般】美術新報 此書によりて南氏の清く高き藝術と趣味の一端が窺はれる事は言を俟たず、紛々たる時流の外に超然として自家の識見と確信とを懷抱する著者には聴くべく學ぶべきものが多い。大阪毎日新聞 觀察も叙述も著者の作畫に見るやうな温籍な明るい色と光に充ちてゐる。……何處までも畫趣をさぐるやうな氣持で、自然と人事に對してゐる著者の面目は、いつの間にか讀者の旅の道伴のやうに叙述のなかに引込まなければ止まない懐かしさがある。帝國文學 ナボリ、ボンハイウエネチヤ、バドヴァ、ピサなど伊太利の名立たる美術名所をたづね、セガンチニ、ザオットオなどの神技に接して靈妙なる藝術の園に神魂を遊ばしめ、ゆくゆく畫趣を探りし繪行脚の日記、さては記録をあつめたもの。……雅致ある文藻と畫趣と相俟つて讀者を魅了せずんば已まず讀賣新聞 研究があり、感想があり、紀行があり、追憶があり、畫家獨特の筆致を持つてゐて、頗る及び難いものがある。とりくに面白い中で、自分は最も「東西覺え書」に興味を覺えた。「畫室の出来る迄」などは文壇に出しても二流と落ちる作品ではない。……素より美術に興味ある人の必讀たるは云ふまでもないが、一般人士にとつても、興味の深い好著として喜ばれやう。

澤村寅二郎氏譯

第八編 ラ ス キ ン 抄

四六版三七六頁
ラスキン肖像銅版
凸版銅版十六圖入

【世評一般】東京朝日新聞 近代美學の泰斗ラスキンの著述中より其の粹を抜きとして自然と美術と文學とに關する要旨を會得せしめんと努む。「美」「自然」「詩」「藝術」「繪畫」「建築及彫刻」の六編に分ち以つてラスキンの立脚地と批判の要を悉して頗る體を得たるを覺ゆ。生活と藝術 ラスキンの著作は頗る大部で、それを通讀することは、なかく大事業であるが、近代文藝を考察するには、しかし是非とも一讀する必要がある。この抄譯を得たことは、たしかに一部の要求に適應したものと謂はなければならぬ。……譯筆極めて平明で、ラスキン研究者のためには頗るありがたいものである。學生 ラスキンの近世畫家、エザンバラ講演(全譯)、美術上の論文中から抄譯したもので、玉のやうな哲人の思想が、原文と殆んど同じやうな調子の譯文で現はれてゐるのは嬉しい。文明評論 ラスキンの思想を窺ふには此の譯書は實によき手引である。澤村氏の譯文は此の思想を行ふに相應しい洗練したものである。讀賣新聞 普通抄といへば金言名句のみを集めたるが如しと雖も、本書は然らず、相當に一貫せる主張を述べたるもの、以つて泰西美術の大批評家が思想の面影を偲ぶべし、近時の一頁譯とするを憚らず。

森田龜之輔氏著

第十一篇 藝術家と藝術運動

四六版三六五頁
網目版十九葉

【世評一般】 學生 スウザ・カルドオミアの「海景」の三色版で膽を奪はれ、次いで目錄から深い沼の人を引きつけるやうに、一種の力を持った巨匠ロダンの評傳が展開する……終に彫刻界の巨人ムニエエの評傳が載せられ……中央に蟠踞してゐるのが泰西畫界の最近運動と題する一大長篇論文で、近代の主義の短い事から最新の藝術運動に見られる通有性を説き、主觀客觀、それから新運動の起つた機縁やら、後期印象派、キュビズム、未來派、コンボジシヨナリズムに説き及ぼしてゐる。實に近來に稀な眞面目な有益な勞作である。國語新聞 行文は明快であつて能く其の要旨を得、それに添えた最新藝術の寫眞版廿葉は此書の價値に裏書してゐる近來の好著である。萬朝報 近年泰西藝術界は新主義躍起して一種の奇觀を呈しつゝあるが、此書は此等の重なるものに就て、その根本原理と成果とを明かにし、よく吾人の知らんとする所を教ふ。東京朝日 極めて穩健の態度を以て精透の評論を試みたるは洵に熟讀に値するものあり。國民新聞 美術界の風潮に後れざらん爲には是非とも一讀の要ある好著である。

黑板博士序
黑田鵬心著

第四版發行

日本美術史講話

全一冊

四六版本文六百頁
寫眞版百四十二圖入
索引二種表一種附

本書は曩に趣味叢書第三篇及第六篇として發行したるものを、今回第四版に際し、合本としたるもの也。本書が唯一の日本美術史として好評噴々たるは茲に贅せず。又今回は特に學生諸君の爲めに廉價なる並製を發賣せり。

定價 上製貳圓貳拾錢
並製壹圓七拾錢
送料 市内四錢 地方拾貳錢

趣味叢書發行所

毎月一回発行

主幹 黒田鵬心 編輯 吉田鼓山 圖案 杉浦非水

趣味之友

菊版百十二頁口繪挿入
定價一冊二十錢 送料一錢五厘
半年分郵送料共前金一圓十四錢
一年分同 前金二圓廿二錢

發刊の趣旨

今日の我が國には色々の雑誌が多過ぎる程あります。殊に婦人雑誌、小供雑誌、文學雑誌、美術雑誌、娛樂雑誌などは、何れも十數種を數へる程あつて、撰擇に迷ふ位です。併し趣味の普及向上を第一の目的とした雑誌は、一つもありません。否な多くの雑誌は、寧ろ趣味の方面を閉却してゐる様に見受けられます。我々が今度「趣味之友」は趣味の普及向上を第一の目的とし、その缺陷を補はんが爲めであり、最も廣い範圍に於いて——美術、工藝、裝飾、圖案、演劇、音樂、舞蹈、服飾、其他娛樂に至るまで、つまり我々の日常生活の趣味を豊かにし、高めやうと云ふのであります。ですから「趣味之友」は、あらゆる階級、職業、年齢の人々に、爲めになり且面白い雑誌にしたいと思ひます。

創刊新年號要目 (十二月二十日發行)

- 現代の趣味に對する感想と批判……………三十名家
- 趣味の涵養……………文學博士 上田萬年
- 龍の裝飾……………工學博士 塚本靖
- 龍の繪……………川合玉堂
- 帶……………鈴木三重吉
- 海峽……………尾島菊子
- 勿忘草紙……………吉井勇
- 芝居見物の費用……………上司小劍
- 松助の小兵衛……………岡田八千代
- 趣味の園藝……………川地農學士
- 早春(口繪)……………伊太利名畫
- 追羽子の後(口繪)……………鏑木清方
- 趣味とし西洋畫……………黒田清輝
- 日用趣味……………岩村透
- 趣味講壇……………黒田鵬心
- 戰爭中の巴里の流行……………森田恒友
- 俳優の手拭……………綠太郎
- 淺草趣味……………岩田烏山
- 新年の床飾……………高橋箒庵
- スラント硝子の窓……………海老原茂
- 寫眞の撮り方……………泉谷氏一
- 月評(展覽會、演劇、其他)……………
- 月報(美術、演劇、音樂、其他)……………

I-942

10/10/1942